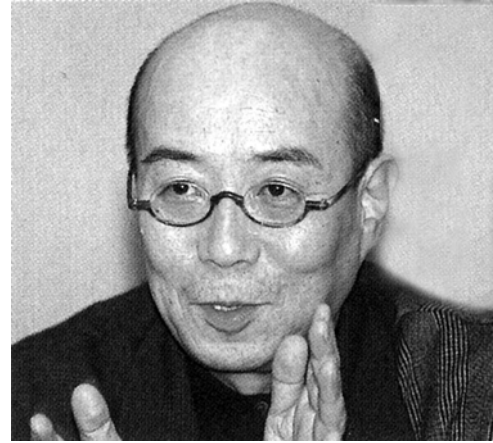


哲学は面白い、哲学を楽しもう

大阪大学総長 鷲田清一

はじめに

この数年間、私は人の話を聴くことの意味とか、何かを待つことの意味をテーマとしていろいろなことを考えてきたので、お寺さんからお声がかかることが多いのです。真宗の東本願寺や西本願寺の方から「聴くというのは真宗の心なのです」、「先生、真宗でもないのによくそういうことを考えつきましたね」とか言って、うちで話してくださいと言われます。浄土宗の智積院や真言宗智山派の方などからも話をたのまれて、「私どもの考え方はあなたに近い」と言われたりして、正直なところ仏教の本を読んだことがないので不思議な感じを抱きながら、



時々お話させていただきます。お寺で話をするのは正直言って苦痛です。前に座っていらっしゃる方々が、私自身の鏡のようなヘアースタイルをしていらっしゃるから、まぶしくて緊張するのではなく、ご本尊の前でご本尊を背にして話をさせられるからです。それがつらくて、だんだん横を向いてしゃべるようになります。今日の私の緊張度はそれに勝るとも劣りません。この皆さんの熱気がこわいです。いろいろ準備してきたのですが、雰囲気か思っていたのと違うので、哲学放談にさせていただきたいと思います。

今日は「哲学はおもしろい」という題で話をすることにさせていただいたのですが、今日来て、しまったと思うことがもう一つあります。司会の畑田先生はすごい理屈の好きな先生ですし、科学（サイエンス）を愛していらっしゃるので、それに応えないといけないと思って、先生がやっておられる高分子科学など理学系の学問に哲学は負けないぞと思い、ちょっと小難しいレジメを準備していたのです。これが失敗だったということです。私の心の本当の在り処はこの私の作ってきたレジメのようなどころにはないのです。

哲学は学問の女王 難しい哲学と身近な哲学

哲学はあらゆる学問の中の女王と言われていて、大学で一番基礎的なことをやる学問です。同時に、大学で一番アマチュアっぽい学問とも言えます。一番プロっぽい学問であると同時に、一番アマチュアっぽい学問でもあるのです。哲学を研究している人は小難しいことを言いますし、哲学の本を読んでみようかと思って、カントとかヘーゲルの本を開いてみると、お経に近い、漢字だらけの文章で、普段使わない言葉が沢山出てきます。ここに書いてあることが私の人生と何の関係があるのかと思うほど難しい。だから、哲学者というのは浮世離れた認識論とか、存在論とか形而上学とか、人生とぜんぜん関係のない、上の方で理屈だけこねている人たちというイメージをお持ちの方が多いのではないかと思います。

ところが、こういう難しい哲学とは全然違う世界に居られる方にも、何となくイメージがつかめる哲学という言葉が使われることがあります。あの人の考えにはきっちりした哲学があるとか、家を建てる大工さんの哲学、経営者の経営哲学、人生の哲学などという場合です。本屋に行くこと

経営の哲学とか、商人の哲学とかいう本が並んでいます。哲学とは何か一本筋の通った、非常に基本的な原理・ものの考え方ということになります。人生をいかに歩むかについて、きっちりした考え方を持ち、自分でその通りに生きている人を見ると、「あの人には哲学がある」と言います。こういう哲学を持っている人は町中に一杯おられるわけです。一方、大学の文学部の哲学科の研究室のようなどころでは、哲学の学術雑誌を読んで、難しい議論をしております。専門家でないものには何のことも全然分からないようなプロの世界です。哲学には、このように、「難しくて分かりにくい」というイメージと、「あの人には哲学があるなあ」というイメージの両極端のイメージがあると思います。

臨床哲学事始

今日「哲学は面白い」というお話をさせていただくわけですが、私自身は両極端に関わってきました。大学では20歳くらいのときから、ヨーロッパの近代哲学の本をドイツ語やフランス語で読みこなし、学者同士で議論をし、多くの学術論文を書いてきました。でも、これは哲学の研究であって、哲学することとは少し違うと若いときから思っておりました。大学の中で、皆が、したり顔で、難しい言葉で、フランス語やドイツ語をまじえて、すごく細かいことを議論するのは、それ自身は推理小説を読むようで楽しいのですが、これは哲学を学ぶ一つの手段であって、哲学が本当に為すべきことは他にあるのではないかと、ずっと思い続けてきたわけです。そんな訳で、若いときから哲学の学会で論文を発表するのと同じくらいの数の文章を、友達と作った同人雑誌の中に書いてきました。この同人誌に書いた文章には、友達と共著の哲学の文章もあれば、哲学とは無関係の文章もあります。その後、1980年代から、全くの偶然ですが、ファッション雑誌に文章を書かせていただく機会が出来ました。哲学特有の言葉を一切使わないというのが条件でした。それ以来、10年ほど、服を着ることの意味、ファッションデザイナーの仕事、あるいは、ファッションのメディアなどについて、哲学の論文とは、言葉も文体も全然違う文章を書いてきました。その後で、先ほど畑田先生から紹介がありました臨床哲学をやることになったのです。それまでは、大学の哲学科の倫理学の教授だったのですが、その看板をはずして、臨床哲学に変えました。ここで、はじめて、若いときからずっと大学で研究してきた従来型の哲学と、哲学は本来こんなものであるはずがない、哲学は誰もが持っていないといけないもの、誰もがやらなければならないものという思いでやってきた仕事とを一つに結びつけることができたのだと思います。私が40代の半ばになったときに、哲学のバリバリの研究者だった前任の先生がお辞めになりました。それまでは、その先生の期待を裏切ってはいけないと思い、忠実にお仕えしていたのですが、実際は、先生の見えないところで、臨床哲学といえるような活動をいっぱいやっていました。そんなわけで、40代の半ばに、自分が教室を預かることになった時に、同僚と相談して、臨床哲学に看板を変えました。こういう講座は、日本では今も一つしかございません。

臨床とは、本来、病床に臨むことをいいます。臨床医学というのは、基礎医学に対して、患者を実地に診察・治療する医学のことです。臨床の英語はクリニカルで、実際に診察・治療するところがクリニックです。この言葉はもともとギリシャ語で、ベッドサイドのことです。お医者さんが、患者さんが臥していらっしゃる場所へ行行って治療することを、臨床というふうにヨーロッパ人は考えたわけです。

私たちがやろうとしている臨床哲学は、体の病気だけではなくて、いろいろな心のトラブル、

思い悩み、職場や学校などの労働現場で発生しているいろいろな問題に関わっています。その発生しているところを社会のベッドサイドだと考えて、そこへ研究室から出かけて行って現場の人たちと一緒に考えてみる哲学です。哲学は、普通は、書斎や研究室でやるもののように考えられていますが、そうではなくて、研究室からいろいろな問題が起こっている社会の現場に出かけて行って、現場の人たちの話し合いに参加するのです。現場の人たちだけの話し合いだと、煮つまるというか、視野の狭い、あるいは、一方的な結論が出てしまうことがあります。そんな時に、現場のことをあまり知らない哲学の研究者が中に入って、皆さんが当たり前のように言っておられることに、「どうしてそうなるのですか」と「なぜ」という問いを発することで、その現場のいろいろな議論の視点を広く持つていただくように、考えようによってはお節介かもしれませんが、介入していく活動をしています。私自身の場合は、看護、介護の現場との結びつきが強く、看護師さんのスタッフミーティングや症例研究で、「あの患者さんはこういう治療を受けて、われわれはこういう看護をして、退院されたけれども、あれでよかったのだろうか」というようなことが議論されているところへよく行きます。あるいは、精神科や臨床心理の先生が集まって、患者の治療方針を相談されている場に入れていただいたりしてきました。

臨床哲学の実践

一例を申し上げます。最初に看護師さんの集まりに行った時のことです。若い看護師さんに看護教育をしておられる先生方も含めてリーダー的な方が沢山居られました。「看護師は単にドクターの手伝いをするのではなくて、患者の側に立って物を見る、あるいは、患者をまず人として理解することから始めないといけない」と皆が言われる。「患者の全人的理解をベースにして、看護しないといけない。医療技術を上手にこなし、患者の発言をその言葉通りに信じて看護するだけでは駄目だ」とおっしゃる。患者一人ひとりを全人的に理解しないといけないとおっしゃった時に、私は、おそろしいことを言われるなあ、と思ってショックを受けました。われわれは自分のこともよく分からない。家族の事だって何十年も一緒に暮らしてきても、ふと時々分からなくなる。夫婦でも、ある時突然何か言われた時に、「えっ、何でこの人こんなことを言っているのだろう」と思って、その人の中に暗黒を見る思いでヒヤッとすることがあります。親しい家族、もっと言えば、自分の事だって分からないのに、他人を全人的に理解するなんて、そんなこと普通の人間には不可能じゃないかと、ボソッと言ったのです。そうしたら、せっかく議論がうまく進んでいるのに、何でそんなことを言うのかというような顔をされた方もいましたが、一応分かって下さって、「あの人のことが分かるということは一体どういうことなのか」というところから考え始めないといけないのではないかという話になりました。「分かるとはどういうことか」という話し合いをしていると、看護師さんは、最初は、問題がすごく深まったように思って、「哲学は面白いですね」と言ってくれるのですが、何回も、何回も私がやっているうちに、だんだんいやな顔をされるようになりました。折角分かりかけてきたように思っていたのに、いつまでしゃべっても結論が出ないとおっしゃるわけです。それでも、1年ぐらしかけて毎週お喋りをしていると、「私も自分でちゃんと哲学の本を読んでみよう」と言われるくらいまで変わってこられます。ただ、「これ、おかしいのではないですか」と言うだけなら誰でも出来ます。その時に、ただ無責任に言うのではなくて、専門的な立場からの支援をしたいのです。私どもは、哲学の分野で、古今東西いろいろな国のいろいろな人が、人の死についてどのように考えてきたか、あるいは、もの

が分かるとはどういうことかについて、いろいろと研究をしてきたわけです。そのプロとしての勉強の成果を、ちょっとはお役に立てたいなと思っているのです。

分かるとは 同じということ、違うということ

皆さんは、よく、分かるということは、考え方が同じになること、気持ちが同じになること、だと言われます。しかし、必ずしもそうではないのです。普通は、いろいろと話し合っているうちに相手と同じ考えや同じ気持ちになる、相手の気持ちになる、あるいは、なれることを分かるというのかもしれませんが、私はそうは考えません。人間が誰かのことを深く理解するということは、その人と交わりを増し、いろいろと話し合う中で、だんだん相手と自分は本当に違うということを知らされることだと思うのです。同じように考え、感じていると思っていたのに、一つ一つ具体的に例を出して、時間をかけて話していると、えっ、ここはこう考えると思っていたのに、その人は微妙に違う受けとり方をし、感じ方をしておられる、こんなことでも、こんな風に自分と相手は違うのか、生きてきた人生、背景が違えば、同じものを見てもこんな風に受けとめ方、感じ方が違うのだということが分かってきます。あるいは、私はこんな時にこう考える癖があるけれども、その考えに従って何かを実行するとうまくいかないことがある、もっと別の大事な視点があるのだな、というようなことが分かってくるのです。そういうわけで、私は、気持ちが一緒になるとか、考えが一緒になるというような理解は幅の狭いものでしかないと思うのです。二人の妥協の産物でしかないともいえます。たとえば、今日ここにお集まりの全員が合意することは、すごく簡単なことのように思うのです。全員が一致するということは、後で振り返ってみると、中身のうすいものであることが多いのです。だから全員が合意できたともいえるのです。大事なことは、こういう場で、皆がああだ、こうだと時間をかけて話しているうちに、自分にとっては当たり前なことでも、他の人にとっては当たり前でないとか、自分にとってはたいしたことでもなくて、他の人にとっては大きな発見であるとか、いろいろなことが分かってくるということなのです。自分と他人との違いが分かる、違いを思い知るの方が、理解を深めるという点では重要なのです。そういうことを看護師さんの前で、辛抱強く言わせていただいているうちに、最初は迷惑がられていても、次第に今日のテーマのように「哲学は面白いですね」と言っていただけになります。

哲学の言葉は難しすぎる？

そんなわけで、私は今、古今東西の歴史を勉強して、そこに現れるいろいろな考え方を正確に理解するという仕事と学生の教育をしながら、他方で、大学での研究のことは一旦全部忘れて、何も知らない一人の素人として、看護の現場、教育の現場、経営の現場、労働の現場などいろいろなところへ出かけて行って、それぞれの現場の言葉で仕事の話し合いに関わっていくことをしています。この現場の言葉でというのは大変大事です。なぜかというと、日本の哲学あるいは哲学者が社会から浮いてしまっているように見えるのは、一つは言葉のせいもあるからなのです。たとえば、「有(う)」というのは哲学っぽい言葉です。「有」は、あるのか、ないのかといった議論をするときに使います。最近では、「有」の代わりに、同じ意味の「存在」という言葉が定着してきました。私の存在という言い方をします。私の学生のころは、存在という言葉を使うと、「小難しいことが始まったなあ」とよく言われました。哲学的で、普通の人はめったに使

わな言葉に「生成」とか「自我」があります。自我という言葉は、日常生活では使わないのに皆さんよく知っていらっしゃる言葉です。有、無、生成、自我と四つ並べると大変哲学っぽい。これらをドイツ語で書くと、Sein、Nicht、Werden、Ich となりますが、英語で書くと分かり易いのです。有あるいは存在は、I am とか she is とかの動詞の中の基本中の基本である be 動詞を名詞にした being です。無は何も無いということで、nothing です。生成は何かになるということですから、becoming です。自我は I が me、どちらでもよいと思います。これらは、幼児でも使う一番基本的な言葉です。こういう言葉で哲学を語れば、「哲学は面白い」ということになるわけです。ただ、ここで一つ申し上げて置きたいことは、難しい言葉を使う必要は無いが、言葉とその定義は、きっちりとして置かねばならないということです。たとえば、自己という言葉は英語の self という言葉と同義と考えるのはよくないのです。自己という言葉は人間の自分を指すのです。英語の self は自分で自分に関わること、あるいは、そのような状態をいいます。日本語の自己は人間の自分しか指さないけれども、英語の self は物体でも、機械でも、システムでも、何にでも使えるのです。オートメーションはセルフレギュレーティングともいい、オートメーションのオートはセルフの意味です。オートモビルは自分で動くもの、すなわち、自動車のことです。セルフだけを取り出して自己と訳すと、人間の自己ということになって、英語の self より狭い意味になってしまいます。英和辞典



で self を自我と訳してあることがあります。しかし、私にはなぜ自我などという言葉が出てきたのか理解できません。堅苦しいだけではなく、この言葉を使うことで、余計な問題が出てくるのです。「私」という言葉なら、「私は死ぬか」と問いかけられたら、私は死ぬに決まっているので、答えがすぐに出せます。自我は死ぬか

と言われると、考え込んでしまいます、自我は死ぬのだろうか。私の中の私は死んでも、自我は残るのだろうかというような疑問が浮かびます。英語だと、「I が死んでも I が残るだろうか」は、問いにはなりえません。死んだらもう残らない。それが日本語の哲学の言葉を使うと、「私が死んでも自我は残るのだろうか、どうなのだろう。問題は深いなあ」というようなことになりかねないのです。

ヨーロッパの哲学

ヨーロッパの哲学では自我のような難しい言葉は使わないので、哲学の本は非常に読みやすいのです。大学へ行かなくても、高校でも哲学を教えています。特にフランスでは、高校3年で文系の大学へ行く人には週8時間、理系の大学へ行く人にも週3時間必修の哲学を教えています。ドイツでも、哲学を高校で教えています。そこで、科学とは何か、自然とは何なのか、身体って何だろう、心とは...そういうことから、いろいろな考え方を学ぶのです。日本はどうでしょうか。哲学どころか倫理や世界史まで減らしたり、あるいは、受験校と呼ばれる学校では授業をしてい

る振りをして、実際は英語の授業をやったりしています。物事の根本原理が軽んじられているのです。

ヨーロッパの哲学では、超難解な哲学者と言われているヘーゲルという大哲学者の論理学の本がありますが、その本の日本語版は「始元」という語で始まり、第一章で有と無と生成が論じられています。「始元」という日本語は耳で聞いても、全然分かりません。この本の表題をドイツ語原文から直訳すると「学問は何から始めないといけないのか？」となります。序文に続く第一章が Sein、Nicht、Werden、英語に直すと being、nothing、becoming です。これなら、子供でも分かります。子供が「僕でも分かるかもしれない」と思うかもしれませんがね。哲学とは本来そういうものなのです。ヨーロッパの哲学は、誰もが日常使っている言葉を、たとえば、「ある」とはどういうことか、「ない」とはどういうことか、「なる」とはどういうことかを、もう一度きっちりと定義し直して、自分たちの議論を正確なものにしていくということを目指しているのです。したがって、物事を考える時の作法を叩き込むのが哲学の授業なのです。正確に物を考える、きっちりと定義された言葉を使って、誰もが納得できる議論をするのが、哲学です。きっちりと定義されていれば、特殊な言葉や難しい言葉を使う必要など全然無いのです。beginning を始元と訳すなどは、とんでもないことだと、私は思います。beginning は「始め」でよいのです。さあ、これから哲学をはじめよう、哲学の世界について考えよう、でも、「始めるってどういうことなのだろう」と考えるところから始めるのです。さらに、何から始めるのか、たとえば、世界について考えるのであれば、世界のどこかで起こっている事件から始めるのか、あるいは、私たちの過去の出来事から始めるのか、あるいは、もっと抽象的に、今ということから始めるのか、それならば、その前に、今とはどういうことか、いろいろと議論するのです。最後には、事件もある、この社会もある、今もあるという、このすべてに共通している「ある」ということから始める方が、beginning としては良いのではないかということになります。ものすごく正確に、正確に一歩ずつさあ始めよう、何から始めようかということまで、きっちりと議論するのです。そこが哲学の徹底的なところですよ。日頃使っている言葉であれ、多少耳慣れない言葉であれ、皆が納得する形で正確に定義された言葉を使って、丁寧に議論するのが哲学の根本原理です。

哲学カフェと私

私は臨床哲学で、お寺やカルチャーセンターなどいろいろなところで哲学カフェを、50人ぐらいの人数でやっています。一つの問題で5時間ぐらい議論をします。年齢は10~80代、男女の数も大体同じにして、全く見知らぬ人同士、しかも名前のほかはお互い職業も年齢も出身地も居住地も言わないで、いきなり5時間ぐらい議論するのです。

その第一回目では、「他人が分かるとはどういうことか」をテーマに議論しました。まず、一切準備はしておかないで、「今日は何を話しましょうか」と切り出します。皆さんと、最近どんなことが気になるかをいろいろ話しているうちに、いくつかの共通性のある問いが出てきて、「それでは、今日はこれについて話しましょう」ということになります。話し合いの中で、哲学者や友達など他人の考えを自分のもののように言わないというのが一つの決まりです。この決まりを守るために、必ず、自分が体験した具体的な事例を一つ紹介して、そこから議論を組み立てていくようにします。哲学の言葉は一切無しで、皆が日常使っている言葉で議論を組み立てていくトレーニングを何回も何回も、1回5時間ぐらいかけてやるわけです。先ほど言った現場の言葉でとい

うのは、その現場で日常使っている言葉でという意味です。哲学の分野での議論なら、いろいろな専門用語を駆使して、てきぱきとやりますが、そういう専門用語は一切使わないで、たとえば、看護師さんの集まりなら、医療の現場で日常的に使われている言葉で、私どもも一緒に話をするのです。医療現場で使われている言葉には私には暗号みたいで分からない言葉がいっぱいあります。それについては、しつこく聞いて、理解する努力をします。哲学の議論とは、本来、社会のいろいろな分野で、こういうやりかたで議論をすることなのです。日本の哲学は、最初に非常に難しい術語を作り、学者がそれらを使って議論することに慣れてしまったために、一般の人たちから遊離した専門分野になったのだと思います。極論すれば、日本の哲学は哲学本来の姿ではないともいえます。

日本の哲学の専門用語はなぜ難しくなったのか

哲学の専門用語が難しくなったのは、最初に哲学を志した人たちの所為ばかりではありません。日本語の性格にも原因があるのです。たとえば、「ある」という言葉をなぜ「存在」というような難しい訳し方をしたのでしょうか。理由は簡単で、be 動詞に当たる日本語には「ある」と「いる」の二つがあるからです。「I am」は日本語では「私はいる」になります。「He is」なら「彼はいる」です。主語が虫なら「虫がいる」となります。ところが、主語がお金だと「お金がある」と言います。機会がある、社会がある、学校がある、という表現で「いる」は使えません。両方に使える言葉として「存在」が選ばれたのだらうと思います。「いる」と「ある」については、いろいろな説がありますが、一番分かりやすい説を一つだけ紹介しますと、命のあるものには「いる」という言葉を当てる、命のないものには「ある」を当てるという説です。命のあるものについては、人に害毒を与えるものでも、あるいは、本当に小さな命でも「いる」と言うのです。ゲジゲジもアブラムシも「いる」です。一方、命がないものについてはどんなに大切なものでも、どんなに上等なものでも、「ある」なのです。「名誉」も「ある」であって、「いる」は使いません。「ある」と「いる」は日本語では明確に区別されているのです。

勿論、言葉は時代とともに変わります。明治時代には、「私はある」、「彼がある」という言い方をしました。漱石の文にも時々出てきます。でも、今は命のあるものには「いる」、命のないものには「ある」なのです。ただ、英語の本を訳す時には、be 動詞が出てくるたびに「ある」と「いる」を区別しなければならないことになって、困るのです。Being を「あること」と訳しても半分しか指さないし、「いること」と訳しても半分しか訳したことになります。仕方なく、「ある」と「いる」の両方の意味を含む言葉を一語選び出す必要があるということで、最初は漢語から「有(う)」を選んだのです。有無の「有(う)」です。これが結構長い期間使われていたのですが、その後、「有(う)」は困るということになってきました。なぜかという、「有(う)」は「持つ」という意味も持っている、これは困るということです。be 動詞と have は英語の一番基本的な動詞であり、助動詞でもあります。その be と have が同じ日本語になっては絶対困ります。それで have の方は「所有」として、「有(う)」の方はあらためて、「存在」という言葉で置き換えたわけです。

こんな難しい言葉を使わざるを得なくなったのは、日本語の場合、指すものが一緒でも言い方がいろいろあるということにも深く関わっています。普段、自分のことを言うのに使っている言葉には、わたし、わたくし、わし、あて、うち、などいろいろあります。しゃべっている相手が誰かによって使う言葉が決まってきます。われわれは最初から多重人格的なのです。今日のお話

の中では、自分のことを、わたくし、わたしと喋っていますが、帰りに友達に会った場合には、ぼく、おれ、などと言うことになると思います。日本語の人称代名詞は、誰と喋っているかによって、どんどん取り替えられて、定まらないのです。私の場合は、「ぼく」を一番良く使いますが、文章に「ぼく」を使うと、人は本気で読んでくださらないのです。それで、文章を書く時には出来るだけ「私(わたし、あるいは、わたくし)」を使うようにしています。ところが、普通名詞として使う必要が出てきたときには、「私」では困るのです。それで、自我という言葉が出てきたのだと思います。自我心理学と言われると、なんとなく学問的雰囲気は漂いますが、「わたし心理学」とか「ぼく哲学」とか言うと、いいかげんな学問という感じがするかもしれません。それで、学問分野では自我という言葉が残ってきたのです。しかし、そのために、自分のことを考える時に、「自我が発達してくる」とか、「私の中の自我」というような、誤解を生む恐れのある表現が使われるようになったのです。これらの表現は、私の中に自我という別の仕組みのようなものがあると、それが育ってくるとか、壊れるとかいうイメージを与えかねません。変な議論です。フロイトという精神分析の医者はこの自我という言葉で、一つの仕組みに見立てて、エゴ、スーパーエゴあるいはアンコンシャスネス(無意識)などいろいろな言い方をしていますが、普通は、エゴはラテン語のアイという意味で、わたしに当たる言葉です。

ここであらためて、先ほどの存在ですが、「在」一文字の方が、シンプルで良いのではないかという意見もあります。ところが、「在」も本当はあるとは一寸違うのです。在郷、在宅というように、一定の場所にあるとか、何かに所属していると言う意味が非常に強いのです。「存」一文字にすると、存続とか、保つとか、手元にとって置くという意味が強くなる。「存」でも「在」でもbeに当たる日本語にはならないということなのです。それで、これらを組み合わせて存在となったわけです。

自我の場合も事情はよく似ています。「自」だけでは自己と一緒にしてしまうし、「我」では利己的とか、わがままとか、エゴイズムとか、自分勝手とか、我を通すというように、英語のセルフフィッシュのような意味になって、「私」は悪役しか演じられないようなことになってしまいます。結局、今までにない新しい言葉を作って、自我というのはラテン語のエゴのことで、英語のアイのことであると定義したわけです。その結果、こういう事情を良く知らない人には、日本の哲学の本は読めない本になってしまったのです。日本で、哲学がだんだんと浮世離れた、専門家だけのものになってしまった理由です。

ヨーロッパの哲学も本当は難しい

ヨーロッパでは、先ほど言いましたように、誰もが日常使っている言葉を、もう一度きっちりと定義し直して、自分たちの議論を誰もが納得できる形で正確なものにしていくという物事を考える時の作法を、高校の哲学の授業で生徒に叩き込んでいます。高校のときから、自分たちの一番よく使う言葉で、物事の意味を掘り下げていく訓練をしているのです。ただ、ヨーロッパでも、哲学そのものは決して易しくはありません。日本での哲学は難しいというイメージは、読んでもピンとこないほど言葉が難しいというところからきています。ヨーロッパでは、言葉は日常使う易しい言葉なのですが、日常あたりまえだと思っていることを、いちいち、これはこういう意味で、あれはああいう意味だとか、「わたし」は一人称の話者として使うなど、話す人が自分のことを言う時のことばを、もう一度きっちりと定義し直して、議論するのです。普段、ごく普通に使

っている言葉の使い方を、それはちょっと使い方が間違っているとか、ここでその言葉を使うのは適切でないとか、いろいろと、しつこく論理的に話をするのです。途中でしんどくなって、もう少しいい加減でも良いのではないかという風になってしまって、根気が続かないというようなことがあります。日本の場合は、言葉の選択に苦労した代わりに、その一見難しい言葉を使っている議論そのものは、比較的短時間で終わってしまうというところがあります。どちらが良いのか、なかなか簡単には言えないのですが、ヨーロッパでは、なぜこのような、日本と異なる哲学がはやったかと言いますと、ヨーロッパの文化は伝統的に言葉を大切にす文化だからです。このことは政治を見ればよく分かります。政治では説得の術が大事です。ヨーロッパでは古代から民主制を維持してきました。考えの異なる人たちが、この国をどうするか、この社会をどうするかについて、議会で互いに論議を戦わすわけです。選挙民はそれを見ていて、どちらに理があるか、どちらに説得力があるかを判断するのが選挙であり、政治のやり方なのです。この場合は、言葉が命です。日本では、政治家が異性がらみやお金がらみの問題で失脚することはありますが、喋り方が下手で失脚することはまずありません。一方、ヨーロッパでは異性問題で失脚することはありません。言葉と関係ないことだからです。ミッテランさんなどは本来連れて行ってはいけないような異性を公式の席に平気で連れてこられます。道徳的には良くないとひんしゅくを買っているかもしれませんが、それで失脚することはありません。ヨーロッパで政治家が一発で失脚するのは虚言です。うそをつくということです。以前に、イギリスの議員さんの売春事件がありましたが、あの議員さんが失脚した最終の理由は、売春事件に関係したうえに、そんなことは無いと言い張って、後でその言をひるがえした、すなわち、議会の公式の場でうそをついたからなのです。だから、あの人の言葉を信じることはできない、あの人には社会を任せられない、となって、大きなダメージを受けることになったのです。

勿論、言葉が大切なのは、政治の場だけではなく、社交の場でも非常に大切です。最近、日本人がヨーロッパやアジアによく工場を作りますが、そんな時、日本人は、仕事場ではコミュニケーションをきっちり取れるのだけれども、社交の場になると途端に無口になる、日本のことを聞いても何も答えてくれない、日本の美術の話をしてポカーンとしている、そんな日本人をヨーロッパの人は不思議だなと思います。文化について喋る素養を持っていない人は、ヨーロッパでは無能とみなされます。ヨーロッパでは社交の場を大切にします。社交の場で大切なのは言葉なのです。粋な会話が来て、相手を退屈させない、古典の引用が来て、シェークスピアの台詞を引っ張ってきたり、あるいは、絵画について、「あの作品はね」といった教養を会話に織り交ぜられるのが、個人としての評価につながります。だから社交でも言葉が大事なのです。

アメリカの大統領選挙も言葉の戦いです。ウイットが自己目的化していて、いかに相手の言葉の裏をかき、それに余裕を持ってやりかえすか、もう言葉遊びになってしまっています。あそこまでいくと、逆に演出過剰でちょっとやりすぎかな、という気がします。シェークスピアの台詞、漢文、古典がずっと出てくることが社交の場で信用されることにつながる、そういう風にして言葉を大切にしてきたのがヨーロッパの社会です。だから哲学が生まれたのです。ものごとをきちんと論理的に積み上げていって、結論を出す、やり方を決めるという習慣が出来たのです。そういう社会をしっかりと維持していくために、高校の時から哲学を教えるのです。

パリには、日本でいう官僚を養成する大学院があります。皆さんご存知のロースクールの行政版です。そこでは大学院修了時には哲学の論文を一つ書かないといけないことになっています。

これは至極当然のことなのです。プロとして行政に関わる人の使命は、この社会を少しでもより良いものにする、一人でも多くの人が生きて幸せになるような社会にすることです。官僚とはそのために働く人たちです。だから、この社会をより良くするにはどうしたらよいか、一人でも多くの人、自分が生きていて幸福だと思う社会にするにはどうしたらよいか、そのためには財務はどうしたらよいか、会社はどうあるべきか、教育はどうか、文化行政はどうか、国民の税金はどうあるべきか、そういうことを考える人を養成するのがこの大学院の目標なのです。国民に成り代わって良い社会を作ってくれる人を養成する大学院です。社会が良いとはどういうことか、また、幸福とは何なのか、それはお金をためることが、豊かになることが、人から信頼されることか、名誉があることが、愛情深い家庭生活を送っていることが、信頼できる友人をいっぱい持っていることが、将来の心配がないということか、などと考えていると、難しいことだなあと思うでしょう。「幸福とは何だろう」と一度も考えたことのない人、あるいは、幸福についてきっちりした考えを持っていないような人に行政を任せるほど危ないことはありません。だから、フランスでは行政のプロになるための大学院の修了者に哲学の論文を書くことを義務付けているのです。こんな当たり前のことが、日本ではなされていません。日本では、弁護士になるにも、裁判官になるにも、検事になるにも、行政のプロになるにも、受験勉強が一番大事なのです。答えのすぐに出てこない哲学のような学問をやっている余裕など全く無い。そんなことをしていると、司法試験に通らないのです。でもこれを当たり前とっていると、そのうちに、日本はきっと大変なことになります。

市民の哲学勉強はなぜ必要か

なぜ哲学を学ばねばならないのか、ヨーロッパに見習わなければならないことは何か。それは、哲学は、哲学に興味のある人、哲学を研究したい人だけの持ち物ではなくて、市民一人一人が持たなければならないものだということです。たとえば、みんなが幸福になりたいと思ったときに、一人一人が幸福について、どう考えているのか、豊かなことなのか、慎ましやかな生活でも愛情に囲まれて生きてることなのか、信頼に囲まれて生きてることなのか、将来の不安がないことなのか、いろいろな考え方があるはずなのです。市民一人一人が幸福とはどういうことかを考えたこともなく、世間が豊かになれば幸福になれるのだとみなが漠然と考え、それがすべての市民の合意であるということになってしまうと、豊かさにつながらない要因はどんどん削除されていきます。給料が上がるのなら現在の家族生活を犠牲にしてもいいとか、家庭や社会で教育する時間がなければ、教育は学校の先生に全部任せておけばいいとか、次第にそういう社会になっていきます。市民の一人一人がこの社会で生きていくうえで何が一番大事かということについて、きっちりとした考えを持たないと、良い社会にはならないのです。

ところが、今の社会は一見、物事の根本原理をしっかりと考えることがなくても生きていけるようになっていきます。世の中がみんな子供になっているというか、未熟なままでも生きていける社会になっているように思います。最近、大学で先生方や学生さんが不祥事を起こしたときに、正直いって、なぜあんなことをしなければならぬのか私にも分からないことがあります。最近のニュースでびっくりしたのは、耐震偽装問題が起こった時のことです。うそをついた建築士も、偽装を重ねたようで許せなかったのですが、もう一つ耐えがたかったのは、ホテルの経営を指導する立場にある会社の社長さんが、最初は偉そうにしておられたのに、社員も含めてみんなに叩

かれると、急に態度を変えて、うつむいて大変なことをしてしまいましたと言って泣く振りをされました。私はあれを見たとき、そうか、こんな人でも社長が務まるのか、子供の学芸会でもこんな演技はしないのと思いました。

今の日本の社会を成熟社会という人がありますが、成熟社会とは子供でも社長が務まる社会のことなのでしょうか。未熟なままでも、なんだかんだと言っておれば、それなりに通る社会、生きていける社会、みんなが子供のままだでも何とかやっていける社会、それを成熟社会とってよいのでしょうか。確かに、いまの社会のライフラインのシステムはよく整備されています。水道、ガス、電気などの供給システムは勿論のこと、怪我をして病院に行くと、自分たち素人が診断するよりきっちりした診断をして、治療をしてくださるし、子育てで悩みがあれば、自分で考えるよりはカウンセラーというプロに相談すれば解決するかもしれません。子供に物を教えることも、学校の先生に頼りきっておれば何とかかなります。お葬式の挨拶ですら、葬儀社の人にまかせて、ご遺族の方がされないケースが増えているように思います。日常生活の中のいろいろな仕事を、その道のプロがやるケースが増えてきたということでしょうか。家族の介護でも、いろいろな事情があるのでそれ自体悪いと言うわけではないのですが、家族が看るよりは、施設のプロの介護の方がいいという風な考えも出てきています。社会のいわゆる成熟の度合いが高まると、人間の命に関わること、人の誕生や死が家で行われなくなります。死の看取りの後の清拭までがプロ任せ、生まれること、死ぬこと、老いること、病むこと、食べること、排泄することすべてが公共サービス・プロの手で行われます。食べ物は、流通産業のお世話になって、スーパーで買います。排泄の方は、公共の下水道です。命の一番基本のところを、より安心で、確実な社会サービス、もしくは、公共サービスとしてお金を払って買っているわけです。それに依存してやっていけるから、一般の市民は知識がなくても、作法を知らなくても、安心して滞りなく、子は生めるし、死んでいけるし、病気になれば治療も出来る社会になってきました。昔はこんなことは全部家(うち)でやっていたわけです。誕生も、看取りも、介護も、肥汲みもやりましたし、料理も畑の野菜や自分でとってきた魚をさばいてやっていたわけです。最近では、より安全で効率的な方法が公共サービスとして整備されて、私たちはそれをしなくてもよくなりました。それが、社会が近代化したということです。ところが、そのことによって一般市民がだんだん無力になってきました。それを思い知らされたのが阪神・淡路大震災の時です。地震で、そういう公共サービスがびたりと止まった、ガスも水道も出ない、その時に、私たちは西宮を流れている川の水を飲んでもよいのかどうかさえも、判断できなかったのです。また、もし生水で飲めないのであれば、どうすれば安全に飲めるのか、沸騰させるだけでよいのか、何かそれ以外の処置が必要なのか、そういうことを判断できる知識がなくなっていることに気がつきました。あるいは、家がつぶれたので公園でテントもどきのものを、適当な材料で作ろうとしても、子供のときにやったテントの張り方を身体が覚えていない、テント一つしっかりしたものを建てられない、つまり、私たちは生きていくうえで一番基本的な点で無力になってしまっていることに気付かされたのです。

成熟社会と哲学

いわゆる成熟社会では、市民一人ひとりとはどんどん未熟になって、自分一人では何も出来ない子供みtainな存在になっていくのです。ある意味ではとてもこわい社会です。ここで、私たちはもう一度、どんなことがあっても、社会が自然災害に遭っても、戦乱に遭っても、いつでも、も

う一度ゼロから、人間の一番基本の事を再開できる知恵と力を付けて置かなければならないことに気付くべきです。そのことのできた市民で満たされた社会が本当の成熟社会ではないでしょうか。どんな壊滅的なことが起こっても、みんなで協力しながら一からやり直せる社会、そんな時に、これだけは絶対にしてはならない、これだけは守らなければならないというような大事なことを次世代に伝えておくことの出来る教養のある市民で満たされた社会、それが本当の成熟した社会だと思います。いざという時に、市民の一人ひとりが、自分で、あるいは、みんなと協力して生きていける基本的な考え方と作法を身につけている社会のみが成熟を迎えられるのであり、そのために哲学が必要なのです。そのための哲学とは何かというと、一言でいえば、教養を身につけることと言ってもいいと思います。物の軽重をわきまえていること、何が最後の最後まで捨ててはいけない大事なもので、何はあるに越したことは無いが、無くても差し支えの無いものというような、物の軽重をしっかりと判断できることが非常に大事なのです。やれることに限りがあるときに、どれとどれはやって、どれには目をつむるかという判断力を持っていることが大事なのです。

それからもう一点、分からないことに、分からないままでどう適正に対処するのかという問題があります。たとえば、国で非常に大事なことに政治があります。政治の世界は、分からないことばかりです。その一つに、外交問題があります。相手の出方、相手の本音、相手の作戦などが全部読めているのなら事は簡単ですが、実際は、相手が本当のところ何を考えているのか、よく分からない、どう出るのが分からないのです。隠し玉があるかもしれない、もしあったとしたら、こちらは壊滅的な被害を受けるかもしれない、いろいろなケースを考えて、相手の本当の出方が分からないままで、どんな出方をされても大丈夫なように手を打つのが外交です。だからこわいのです。相手の出方がよく分からない時に、分からないままに適正に対処する、そういう勘が外交には要求されます。いろいろなケースがありますが、下交渉を丹念にしておくなど、セーフティネットをどう設定するかが問題です。外交は、不確定な条件の中で即刻決断を求められることのある大変難しい仕事なのです。

国内政治の場合でも同じです。たとえば、財政についていえば、不況対策をとることに反対する人はいません。みんな賛成です。規制緩和にも、大半の人が賛成です。構造改革をしなければならない、より自由で合理的な社会構造を作る必要があるといえば、みんな賛成します。政治の所信表明演説には有難いことばかりが掲げられています。ところが、AとBという二つのこと、たとえば、不況対策と構造改革の両方をする必要があるようなときには、意見がいろいろと分かります。どちらもやらねばならないことです。でも、一遍には出来ない。消費税、企業の活性化など不況対策を先にやって経済を成長させるというのと、いろいろな痛みがあっても、まず構造改革を先にして社会を健全な形にしてから経済成長にとりかかるべきだというのと、二つの考え方があります。どちらが良くて、どちらが悪いということでは無いのですが、不況対策をやってから構造改革に本格的に取り組むのか、構造改革をやってから不況対策に取り掛かるのかで、政策の意味が大きく変わります。その前提になる状況自体が変わってしまうからです。AをやってからBをやるか、BをやってからAをやるかで、A、Bの意味が変わってくるし、効果も変わってくるのです。誰にとっても、どちらが良いと言い切れるものではありません。あまりにも不確定なことが多くて、論争になるのですが、その正解が分からないままで、どちらかに決めないといけないわけです。これが政治的思考の難しさです。

政治だけではありません。身近なところにも、看護・介護の問題があります。家族が病気になった時の看護や介護で、施設のデイケアを受けないと、家族だけではやっていけなくなったとき、実際にどうするのかということも、政治と同様に難しい問題です。その理由は正解が無いからです。お医者さんの判断もあるし、家族の気持ちのよく分かっている看護師さんの判断もあるし、当人の思いもあります。当人の思いとはしばしば対立する家族の思いもあります。介護は個々のケースによって、かなり状況の違うことが多いですし、家族間でも意見の分かれることがあります。施設や病院によっても、また、同じ病院や施設でもスタッフによって意見が異なることもあります。この方は一寸入院が長すぎるのではないですかとか、この方は在宅治療でいけるのではないですかとか、その人の収入面からの判断もあって、大抵の場合、誰かの意見を採用すると、他の人には不安が残るなど、両立しないことが多いものです。すべての人が満足するような正解が無いのが介護の現場です。誰かの一つの意見を採用すると、この人とこの人は何とかなるが、この人にはいろいろな問題が起こる、あるいはこの人は苦しくなるという思いが出現します。正解が無いところで、無理にでも方針を立てないといけなし、答えが無いところで一番よい答えを探さねばならない、非常に不確定なことを決断しなければならないということです。このように、私たちの現実の社会では、本当に大事なことには、答えがないことが多いのです。正解のある問題には、議論なしで対処できます。ところが、政治や介護など大事な現場ほど、不確定で、答えのないことが多いのです。

政治、介護だけではありません。自分の生き方についても、誰もが悩みます。人生の悩みです。何度も何度も岐路に立って、どうしたらいいのか考えます。最近の若い人たちは、自己の存在、自分という存在について悩むようになってきて、自分の独自性、自分は何のために生まれてきたのか、自分はそのまま生きていていいのか、自分が消えた方が周りの人にとっていいのではなからうかなどと考えます。子供でも、自分はまだここにいていいのかとか、自分はなぜ生まれてきたのだろうかなどと思うようです。昔からなんとか症候群と言われてはいますが、子育てがやっと終わった女性なども結構危ないのです。子育てをしている間は、私がいないとだめだという生活をしてきた。また、夫が仕事でくたくたになって帰ってきたら、私が支えないといけなしと思って頑張ってきた。子供が家から去って行ったとき、私は何のために生きるのだろうかと自問すると、自分のために生きるといわざるを得ない。その時に、自分とは一体何なのか、今までの自分をふり返ってみると、人のためにばかり働いてきた、本当の自分というものが何もなかったなどと考えだすと、そう、ドツボに嵌まってしまうのです。

また、男性、女性に限らず、半分ぐらいの人が、自分の周りに人が寄って来なくなるという定年のさびしさを経験します。今まで、あんなに電話してきたり、挨拶に来たり、ゴルフに誘われたりしていたのに、パタッと人が寄り付かなくなる。さびしいことです。だから、また、新しい友だちとのネットワークを作らないと、人間はもたない。あれだけ信念を持って一生懸命働いてきて、周りの人も信頼してくれていたのに、あれは自分の能力、実力ではなく、実は会社の看板の実力だったのか、自分の実力ではなかったのか、ここ何十年会社のためにだけ仕事をして、自分のためには何もしてこなかったのかと、むなしい思いになる時に、人は自己としてのアイデンティティ(同一性)の根拠、つまり「私が今ここにいる理由」が欲しくなるのです。そんな時に、まあいいや、昔の友だちと楽しくやろうと、新しいアイデンティティを見つけることが出来る方はいいのですが、そうでない方が問題なのです。そういう方がふと横を見ると、そこに連れ合い

というすごいアイデンティティがいるのです。夫とは関係なしに堂々と力強く生きていて、自分のネットワークをしっかりと持っている配偶者、その人にペチャッとぬれ落ち葉みたいにくっつきたくなる。多分それが一番安心できるのだと思います。でも、くっつかれた方は迷惑です、邪魔になります。妻は夫がよそを向いている何十年の間に、自己というセルフにけりをつけて、自分なりにしっかりしたネットワークを作り、自分が夢中になれるものを探し当てていたのです。その過程は妻にとってかなり辛かった、ただ遊んでいるだけではむなしいです。でも、お金はないので、お金のかからないことをして人の役に立たないといけない、自分がやっていることが何処かで誰かの役に立っているという感覚がないといくら活動していてもむなしい、自分の存在が何処かで社会とつながっていると本気で思えないとむなしい。趣味のサークルのむなしさはそこにあります。だから、みんな大事なネットワークを作ってがんばっているのです。そこへ、横からくっついて、引っ張る人が出てくると、かなわないということになってしまいます。

人間というのは、10代の子供でもクラスの中ではじきとばされると、ここにいていいのだろうかと考えます。ヨーロッパでは、通知簿が悪かったら、親と先生が喧嘩をします。保護者会で、面接の時に、「うちの子は、そんなに頭が悪い筈が無い」と先生にくっつかかかって、本当に喧嘩するのです。かなりの保護者が先生と言ひ合いをします。そうすると、先生と保護者の間にいる子供は先生と保護者の両方に「ごめんなさい」と言います。そして、家に帰ってから親にしおらしく、「本当は先生の評価が正しいのだ、ごめんなさい」と言う。でも、自分のためにこんなに戦ってくれたということで、親に対する子供の信頼が厚くなるのです。

日本では成績が悪いと、「あなたは先生に見限られますよ」と言って、親と先生が同じ方向から子供を攻めまくる。子供は、本当に信頼できるのは自分と同じような境遇にいる子供だけということにならざるを得ません。

日本の社会は、本来年配の人が感じるような悩みを、小学生のときから感じるような社会になってきたのです。歳がたってつらいのは、寝たきりになったりして、「私はまだここにいていいのか」と思い始めることです。人間は、自分がここにいて誰かの役に立てると思える間は、生き続けられます。昔の漁師さんなら、歳がいくと陸に上がって、獲物を受け取る側にまわって、魚を整理しておればよかったし、それもしんどくなってきたら、網の繕いをすればよかった。それもしんどくなれば、一日中家にいて、孫の世話・子守をしておれば、亡くなるまで自分がそこにいる意味が確認できたのです。今は、子供たちは陸に上がった親によくしてくれるのだけれども、「自分が、迷惑をかけないで、今すぐパーと消えてしまったらみんなは助かるだろうなあ」と思ってしまうような状況になってきたのです。歳がたって、だんだんと人の世話になる機会が多くなるにつれて、魔が差したように、「自分はここにいていいのかな、本当は誰にも迷惑をかけないで死ねたら一番いいのになあ」と悪魔の誘いのような問いが湧いてくるような世の中になりました。

今の小学生、中学生が、お年寄りと同じような問いを自分に向けざるを得ない状態に置かれているのは大変なことだと思います。また、40代で更年期の人、50代で定年を迎える人、あらゆる年代の人が、お年寄りと同じように、自分の存在についての問いに、答えを出せなくて困っているのです。わたしは誰か、わたしの存在の意味は何か、これには答えが出せないのです。歳をとるにつれて自分のことがよく分かってくるわけではないし、自分が存在することの意味がはっきり分かるわけでもありません。こういう問いが普通の問いと違うのは、答えが無いというこ

とです。生きることを意味を考えると、私とは誰かを考えると、死ぬことに意味があるのかどうか、生きていることは本当に死ぬことより良いのかどうか、あるいは、病気の人にはなぜ私だけがこんな辛い目に遭わないといけないのか、こういう問いには答えが出せないのです。誰にも答えが出せない問題というよりは、「問題」ではなくて「課題」なのです。

私は、答えが出る問いを「問題」と呼び、答えが出せなくて、その問いを問い続けること自体が、生きていくうえでの取り組みになるようなものを「課題」と呼んでいます。自分の人生は何だったのか、生きることを意味とは何なのか、自分の存在は他人にとって意味のあるものになり得ているのか、そのことを問うこと自体に意味があるのです。真面目に、そのことを問い続けるのが、人間なのです。一つの答えを求めずに、あるいは、一つの答えに満足せずに、問い続けるところに意味があるのです。そのために哲学が必要であり、芸術が必要なのです。

哲学が必要なのは、医学、数学などの自然科学の分野でも同じです。今、問題があると、あるいは、問題が起こると、それに対する正解が必ず一つあると思っておられる人が多いのですが、大学で研究する学問には、哲学でも、数学でも、物理学でも、大抵の基礎科学では、対立する答えが二つとも成り立つような問いとか、正解がいくつもある問いとか、逆に問いに対する解がどれをとっても全部つじつまが合わないとか、答えの出せない問いがあるとか、そういう学問分野がいっぱいあります。たとえば、20世紀の前半に光が波動なのか、粒子なのか問題になりました。波動としてもつじつまは合うし、粒子と考へてもつじつまが合う。この二つの性質をもつ光とは一体何なのか物理学者を悩ませたのです。私も哲学で同じような悩みを経験しました。カントが携った「世界に始まりがあるか」、「世界に終わりがあるか」という問題です。世界はどこかで始まったと考えると、つい、「始まりの前はどういう状態だったのか」と聞きたくありません。それが分からないと、始まりについて考えられないのです。なぜなら、始まりがあるということ、つじつまが合わなくなってくるからです。始まりは永遠に続いているという人もありますが、永遠に続くとはどういうことなのか、ただ、人間がそれを突き止められないだけではないのか、と果てしなき問いの連鎖が出現します。もし、出来事には原因と結果があるのなら、どこかに原因がないと世界が誕生するはずがない。世界に始まりがあると考えてもおかしいし、ないと考えてもおかしい。こういうのを二律背反というのです。同じことが、世界の終わりについても、あるいは、世界の果てについてもいえます。世界や宇宙の果てはあるのか。あるとすれば、果ての向こうには何があるのかと聞きたくありません。でも、果てがないということになると、われわれの空間がイメージできなくなります。こういうことで18世紀の哲学者は悩んだのです。

私とは何か

自己とは何か、一人ひとりの私は何なのだろうかというのは難しい問題です。「私は私であって私でない」、なぜかという、私というのは、己ひとりのことです。代わりのきかない私、他でもない私です。でも、「私」はみんなが使うことばでしょう。たとえば、同年輩の方が「私は」と言われたら、私は私、あなたが勝手に私と言わないでくださいとは言えません。これは不思議なことですがその通りなのです。だから、私というものが成り立つためには、私を超えていないとダメなのです。つまり、私が私と呼んでいるものは、あなたにとってはあなたであり、あなたが私と呼んでいるものは、私にとってはあなたなのです。こんな複雑で抽象的なことをよく理解していないと、私は自分のことを私とは言えないのです。だから、子供は最初自分のことを自分の名

前で呼ぶわけです。私という言葉がなかなか使えないからです。自分の名前は、本来、他人が自分に呼びかけてくれる言葉です。ということは、私という言葉を使えるようになってはじめて、私は自我に目覚めるか、自己意識を持つようになったといえます。そうして、かけがえのない私を意識していくわけです。だから、哲学的な言い方をしますと、私が私として生まれた時には、私としては既に死んでいる、もうかけがえのない私ではない、生まれた後の私はみんなが私ということを経たうえで出てくる私です。そうすると、私が私となった時には、それはもはや私そのものではないということになります。哲学の問いには答えがない、あるいは複数の答えが成り立ってしまう、あるいは、どちらで考えてもうまくいかない、こういう答えがない問いを考え続けてきたので、ちょっとやそっとではへこたれない力がついています。先ほども言いましたが、われわれの社会で重要な問題には答えがない、分からないままで、いかに適正に対処するかが大事なのです。

教養を高めること、成熟すること

哲学だけではなくて、芸術的にももの考えることも人間にとって大事です。芸術は、絵画でも音楽でもそうですが、たとえば、作曲家がこの音はなぜこの音とこの音なのかと問われても答えられない、あるいは、説明できないのです。絵描きさんが、ここはなぜこの色にするのですか、と聞かれた場合も同じです、うまく説明できません。説明は出来ないけれども、この音楽で、ここはこの音、この和音でなければ絶対駄目なのです、この黄緑のところはピンクには出来ないのです、という必然性はあるのです。感覚的な必然性です。絵描きさんや作曲家のような人の場合は、たしかに何かを感じているけれども、自分でも一体何を感じているのか良く分からない曖昧なもの、でも、体が震えているとか、音にしびれているとか、体を感じている曖昧なものを、そのままに正確に表現することが、絵を描くということであり、曲を作ることなのです。理由が説明できないもの、すごく曖昧なものであって、確定できない要素を持っているのだけれども、この絵では、ここはこの色以外あり得ない、この色を変えたら絵全体が変わってしまうということです。だから、他人に、勝手に、ここの色を直したらなどと言われると、カーとくる、そういうものなのです。哲学者や芸術家というのは、非常に分かりにくいもの、曖昧なもの、微細なものに対して、一方では論理を通して、他方では感覚を通して正確に対応することが得意な人たちです。私たちは分からないものに、分からないままできっちりと対応できるものの感じ方、考え方を身につけることが大事で、それが本当の意味で教養があることであり、成熟することだと思えます。

人生は長いですから、時の流れの中でも、あの時は分からなかったけれど、今なら分かるということが結構あります。問題が起こってから、あるいは、課題を与えられてから、ある時間を置かないと分からないことが一杯あります。その場で、すぐに分からないから、時には悲劇も起こります。今だったら、あんなことは言わなかつたらう、あんなことはしなかつたらう、ということが後になって分かることもいろいろあります。痛い思いをすればするほど、分からないものに、分からないままで対応する力が付いてきます。あえて性急な答えを出さないというのも一つの方法です。良い意味で人生経験をつむということです。これが、哲学があるということです。ものごとの状況を判断し、分からないことに、分からないままで、正確に対処できるということが、あの人には哲学があるということになるのです。あの仕事ぶりには、あの経営には、あの料

理には哲学があるということになるのだと私は思います。



畑田 鷲田先生、長時間、興味深いお話を有難うございました。皆さんに、分かっていただけたか、分かっていただけなかったか、そんなことは問題ではありません。でも、疲れたような顔をしておられる方は誰も居られません。これから、いつもの長い議論が始まるという期待があるからでしょうか。なんでも結構です。どしどし、ご質問、ご意見をお出してください。鷲田先生は、何をたずねていただいても応えてくださいます。それが正しいかどうか、それは分かりません。

鷲田 曖昧なことは、曖昧なままにお話します。

畑田 偉い先生は分からないことは、分からないとおっしゃいます。

鷲田 分からないことは、分からないとおっしゃる方が一番賢いのだと思います。ものが見えてきているのだと思います。分からないことを、分かったような気になってしまうのが一番無知なことです。これは、哲学の父といわれるソクラテスが言っております。無知の知がソクラテスにとって一番大事な知だということです。自分は、本当は知っていないということを知ること、それが知の最高のものなのです。知っていると思いたまえないこと、自分とは何か、世界はなぜあるのか、これらの問いには答えられないけれど、それについて考えれば考えるほど、自分はいかに知っていないかが見えてくる、世の中に出た時に、自分がいかに知っていないかが見えてくることこそが本当の知なのだ、哲学の元祖のソクラテスが言っているのです。

畑田 人間が、いかに生きるべきか、ということを考える場である大学の入学試験に、なぜあんなに短い時間で、答えが一つしかない問題を出すのでしょうか。

鷲田 大阪大学の文学部では多くは論述式の問題です。世界史の問題でも、日本で一番論述式が多いと思います。全部文章で答えないといけない、出来るだけ思考力を見るようにしております。

畑田 皆さん、ご自由にお話ください。今日の録音記録は、後日出版したいと思っておりますので、マイクをお使いください。

質問者A 今日は、宗教の話はなかったのですが、先生は、たとえば、神を信じておられますか。先ほどの自我のお話に関していうと、死んだ後で魂は残るといいますが、それを信じるか、信じないかというようなことでも結構です。

鷲田 このご質問には、話し始めが難しいですね。神というと、世の中には、キリスト教の神とか、アイヌのカムイとか、神と呼んでいるものがいっぱいあるわけです。その時にキリスト教の神から始めるのか、キリスト教の神も、カムイの神も全部含めて、どこにでもある神的なものから始めるのか。私は先ずそれを考えてしまいます。

質問者A さっき先生は、自分は自分であって自分でないという時に、自分を超越と言われました。この超越というところに神と呼べるような存在があるのかどうか、オーム真理教みたいな神ではなくて、ヒトラーみたいな神でもなくて、哲学でいう神あるいは神のような存在があるのかどうか、自分で読んだことはないのですが、デカルトの本に神の存在と魂の存在を証明する

記述があるらしいですが、哲学がいう神、あるいは、ソクラテスがいう神というのがあるのだろうかという質問です。

鷲田 ソクラテスの神と、キリスト教の神とは全然違いますので、どういう神をおっしゃっているのでしょうか。一般に神というと曖昧な話になってしまいます。それぞれの神にもものすごく緻密な意味があるのですから、どの神かを正確に知らないで、神が存在するかどうかの議論は出来ないのです。ヨーロッパの哲学では、キリスト教の神、すなわち、この世を作った神デウスが本当に存在するかどうかを考えて、それから神のことを議論します。哲学では、議論の対象が本当に存在するかどうか、人間が語り得るかどうか、語ってよいのかどうかを話し合ってから、議論を始めるのです。日本には神さんが沢山居られますので、神という言葉の誤解があると困るのです。神抜きで語ってもいいのですよ。

質問者A 超越的な存在があるのか、魂があるのかどうか、物質的なもの以外に心があるのかどうかという質問です。

鷲田 悪口を言っているわけではありませんが、西欧哲学に毒されておられるのではないかと思います。魂について共通の認識を持って語り合うのは難しいのです。キリスト教では靈魂は不滅ということになっております。日本で魂というと、特定の人の魂とか、日本という国の魂とか、いろいろあって、魂についてみんなが同じイメージを持っていることはまずありません。本当に自分の身近な問題として魂を語れる共通の地盤はないし、それについての了解がこの場ですぐに成り立つとも思えません。だからもう少し身近なところから話しを始めるとよいと思います。たとえば、魂という言葉を中心と置き換えると、問題をもう少し身近に語れるものとして、共有できるかもしれません。いま、日本では、心の教育とか言って、「心」をものすごく重視するようになって来ていますが、心を体との対比で考えるのは、狭い考え方なのです。これはヨーロッパの考え方です。人間には心と体という全然違う二つのものが共存している、神は靈魂だけ、精神だけで成り立っている、機械とか物には心はなく、物体だけで出来ているという考え方です。ヨーロッパでは動物も機械と考えます。人間だけが、機械のような機能を持った物体としての体と、心・精神という神を持っている特殊な存在なのだというのがヨーロッパ哲学の考え方なのです。だから、ヨーロッパ人は心と体の関係について古代から現代までずっと論じてきたのです。それで、医学が発達したともいえます。体を単なる物体としてみれば、自動車のボディー、天体のボディーと同じです。ここでいうボディーとは物体・胴体のことです。人間のボディーというのは、人間を単なる物体として見たときの人間のあり方のことです。これが組織化されて、動きのような運動機能を持った場合に身体という言葉で呼ばれます。身体がどんな仕組みで動いているのが分かれば、病気も突き止められます。身体を機能のある実体と見ることで、医学、生理学という学問分野が発達してきたのです。一方、身体とは別に、全然違う精神というものがあるのです。身体には形もあれば大きさもあるし、重さもある、場所もあるし、移動もする。精神の方にはこのような特性がありません。まず、重さがない、気が重いといっても何キロですかと聞かれることは無い。あの人は気が大きいとはいっても気が何リッターぐらいとは言わない。気が長い、気が短いといっても、気が何センチとは言わない。心は何処にあると問われても答えられない。目ですか、喉ですか、脳ですか、そんなことは答えられない。精神には位置がないし、運動もしない。身体と精神は性質が全然違う、精神と身体は別個なのです。それで精神の学問である心理学、精神学、精神分析学などが発達したのです。

私たち日本人はヨーロッパの科学を学んだので、人間を、精神と物体、心と体、に分けて分析する癖がついたのです。明治時代に「健全なる精神は健康なる身体に宿る」というような発想をだんだん真似るようになってきたのです。日本語の「からだ」を表す言葉として昔からあり、今も使われている言葉に、「身(み)」というのがあります。身勝手だとか、身内、身のこなしが悪いなどの使い方をします。身体の身(しん)ですけれど、ボディーの意味はゼロです。ボディーという語は、先ほども言いましたように、まずは物体に対して使われるもので、ヒューマンボディー、人間のボディー、リビングボディーのように、命のある、あるいは、生きているという限定をしない限り身体という意味にはならない。身と言う言葉は、心にも使えるし、体にも使える、ただ、ボディーという意味には使えないという変な言葉なのです。ボディーという意味がない物体という意味で使うのは、せいぜい白身の魚ぐらいでしょうか。これは肉に近い意味です。心を込めてという意味の身を込めて、心をこがすという意味の身をこがすなどでは心と同じ意味に使っています。ある場合には、心と全く同じ使い方をします。

身というのは大変面白い言葉です。身につくという言葉があります。栄養が身につくというのは大変分かりやすい表現です。ところが、教養も身につくのです。あるいは、身重、身軽という言葉があります。身重は体重が重いという意味ではなくて、妊娠しているという意味です。身軽は体重が軽いという意味ではなくて、俊敏であるとか独身であるという意味です。このように、身という言葉には、ボディーという意味が全然ないのです。さらにややこしいのは、自分というのを、身で言い換えられるということです。身のため人のため、身勝手、身内、身の上相談の身は自分ということです。社会的な境遇のことも言います。身を立てるは社会的な地位が向上する、出世するということです。

日本語では簡単に使う「身」ですが、これは、人間を精神と身体の二つに分けて考えるヨーロッパの言葉を全く無視した使い方をする変な言葉ということになります。長々とお話しましたが、私の言いたいことは、神の心と心のことを考える前に、私たちが普段あたりまえのように使っている身という言葉、そして、ヨーロッパ的な考え方に沿えば支離滅裂とも言えるこの言葉の意味をしっかりと考えておくべきだということです。私も身、あなたも身、御身の身はあなたのことです。心であり、体であり、ユウ(you)であり、アイ(I)であり、ソーシャルステータスでもある言葉なのです。想像がつかないほど複雑な言葉です。ヨーロッパ人は、自分たちが、日頃自明のように、気にしないでよく使っている言葉を、どうしてこういう言い方をするのかと考えること



ことで、be とか have とかで整理してやってきたのです。だから、私たち日本人も、むしろこちら側から考えることにしないとイケないのです。神の問題もそうなのです。日本語では、神も身に似た言葉なのです。神様は大変こわい存在です。でも、もう一人のかみさんというこわい人がいます。あと、大神、おかみなどもあって、上の方

にあるものとか、自分より力の強いこわいものを指すときに使うとか、神という言葉も、身と同じように、いろいろな意味で使われます。神の問題も、何教の神という問題も含めて、そのあたりのところから慎重に考えていく必要があります。

質問者A 小学校のときに輪廻転生というのを習ったのですが、先生はそれを信じられますか。

鷲田 私は信じていませんが、こういう考え方は西欧にもあります。19世紀にインドから導入して、ニーチェはこれを信じていたようです。

質問者A ピタゴラスが輪廻転生を信じていたらしいですが。

鷲田 文字通りの輪廻転生は信じていません。たとえば、私が死んだら牛になるとかということを感じていたとは思えません。

畑田 「神のみぞ知る」といいますけれど、あの神はどのような神ですか。

鷲田 われわれには分からないということを感じた表現だと思います。

畑田 われわれには分からないということだけですかね。

鷲田 われわれには分からないということ以外に、偶然という要素があります。原因・結果論では考えられない、予測も出来ない、われわれの科学的分析の範囲を超えているような場合もあると思います。われわれの社会では、物の間に因果関係がある、でも、突き詰めると、物の間にも因果を超えた偶然があるのと同じように、あるいは、それ以上に、人間社会はかなり偶然によって動いていると思います。

畑田 偶然とは何ですか。

鷲田 理由が分からない、なぜ起こったか分からないということです。

畑田 いつかは分かるものですかね。

鷲田 分からないと思っていたけれども、後から考えるとちゃんと必然的だったと分かるものもあります。たとえば、私が今日歩いて駅の方へ帰るときに、上から瓦が落ちてきて頭を打って怪我をして、入院した。さしあたっては、偶然としか思えないですけれども、ひょっとしたら誰かが陰に隠れていて、私が通るときに、落とした、というように、偶然と思っていたけれど、後で考えてみると必然だったということもあるのです。あるいは、落ちかけている瓦がある屋根の傍を歩いている時に、自分が変な歩き方をしたので、自動車が急ブレーキをかけて、その振動で瓦が落ちてしまったとか、後で考えれば、原因が分かる場合もあります。

畑田 そんな時には、自動車がなぜ急ブレーキをかけたかということになってくるのですね。

鷲田 私の歩き方をきっちりと見ていた人がいて、その人がどう証言するかで因果関係が出来てくるのです。

質問者B 私も団塊の世代ですけど、

鷲田 私もとはどういう意味ですか（笑）。

質問者B 失礼いたしました。団塊の世代に近い方もいらっしゃると思うので、つい、言ってしまうました。最近、団塊の世代が、後の世代の面倒を見てこなかったとよく言われます。私は、休みの日に電車に乗ることが多いのですが、大人も含めて電車に乗るマナー、座るマナーがよくない。社会の倫理がどこへ行ったのかと思うことが多いのです。先生は先ほど自己の存在に悩んでいる人が多いと言われましたが、自己の存在は他の存在があってはじめて成り立つように思います。だけど、今は自分のことしか考えていない人が沢山いて、他をあまり意識しないような社会になってきていると思います。今の社会をこのままにしておくと、すごくこわいと思うのです

が、今のこの倫理なき社会をこのままほって置くしかないのか、それとも何かをなすべきかを、お尋ねします。

鷲田 難しい質問です。二つ問題があって、一つは倫理なき社会とおっしゃったこと、もう一つはみんな自分のことを自分とは何かと問わずにはいられなくなっていることです。まず言いたいことは、私は、社会の人々が近代的な社会の成立を望んだ時から、その行き着く先が、今の社会のあり方だと決まってしまったと思っているということです。ただ、倫理については崩れてはいるが、倫理なき社会というような状態ではないと私は考えます。あなたは今の社会はおかしいと思っている、おかしいという気持ちがあるということは、倫理が生きているということです。

質問者B 大人の方とか、サラリーマンの方が、若い者と同じように、本当にマナーが悪いように見えるのです。

鷲田 多分、大人のほうが携帯電話の使用マナーなどは悪いです。

質問者B 電車の座席への座り方もそうです。座席に座る時も、乗る時も、昔だったら、降りる人が先で、割り込む人がいたら、注意する人がいました。今は、全員が降りてしまう前に、皆さん乗ってこられます。昔の礼儀正しい文化はどこに消えたのかと思うと、悲しくなります。そういう人たちがみんな堂々と政治家として活躍しておられたり、大学の先生であったり、偉そうに経済新聞を読んでいるサラリーマンであったりします。表の顔と裏の顔、私も勿論100%礼儀正しいとは言えませんが、今の世の中がエー！ということだらけで、毎日見たくない思いです。

鷲田 何かからお答えしたらよいのか、少々迷います。私はあまり世代論が好きでないのです。私も団塊の世代だし、ああそうなんだと、自分で納得するところもあれば、どんな世代にもすべてのタイプの人がいる、今の世代にも団塊的な人があるし、全然違う人もいる、団塊の世代でひとくくりにして良いとは思えません。思い出の中で世代のイメージがだんだん固まってきて、自分も若いときあの人たちと一緒にいたと思うような、記憶の偽造みたいなことをしてしまうこともあります。

質問者B 私が高校生の頃、バスに乗って、重い荷物を持っていると、前に座っている人が膝の上に荷物を乗せたり、持ってきて下さったり、あるいは、席をつめて座るところを作ったりしてくださった。今、そういう文化は完全に消えました。互いに譲り合うより、他人から離れようとしています。

鷲田 おっしゃることはよく分かるのですが、でも押しのけるのを最初にやってきたのは、ひょっとすると、過去にそういう礼儀正しい文化を持っていた人たちかもしれない。私が小学生のときのことを、ちょっとお話をさせていただきます。私たちの小学校のグラウンドは1周がせいぜい80メートルぐらいの小さなものでした。55人から60人のクラスが1学年に五つずつあり、1年生から6年生まで合わせますと、2000人弱の生徒たちが、休み時間になると、その小さな校庭に、一斉に出てくるのです。ドッジボールなど絶対出来る筈が無いのですけれども、隙間を見つけてやるのです。一旦倒れたら大変です。女の子のスカートが顔に当たるわ、縄跳びの縄があたるわ、という状態です。半分ぐらいの生徒は校庭の周りの壁にもたれて、しまった今日は場所がとれなかったと思って、皆が遊んでいるのを眺めている。そういう騒然とした中で、人を押しのけるということが、生きるということに近い存在だったのです。

戦後、昭和22年以降生まれの一群の世代は、社会的には物をつくらなかった世代だと、私は、思っています。思い出話として、始めてライブをやったとか、デモをやったとか、アートはすべ

て始めてやったとか、バンドブームの先駆けだとか、音楽のシャワーをあびるように育って洋楽が身についたとか、いろいろな自慢話を若い子にするけれども、あの人たちがやったことは、前世代の人が作ったものを、いかに使うかということだったと思うのです。たとえば、オートバイも、トランジスタラジオやオーディオの仕組みも、エレキ楽器も、前世代の人たちが一所懸命考えて作ったもので、それに乗かって使うことだけを無茶苦茶派手にやって、カルチャーとして広げたのだと思うのです。音楽も自分たちでやる、自動車も自分たちのものとして駆使する、10代からの服飾文化を創る、というふうにやってきたけれども、それは、全部消費するかたちでやってきて、本当の意味での技術的、あるいは、社会的仕組みとしての基礎は作らなかった世代ではないかなと思うのです。自分たちの世代が作ってきたものを考えたときに、そういう思いが湧き上がるのです。これは、私の一つの総括でもあるのです。

ここで、ちょっと倫理のことを言いますと、どの時代も「今の若い者は」という形で動いてきました。だから、団塊の世代も、若い女の人があんな短いパンツが見えるようなスカートをはいてとんでもないとか、男がピンクのブラウスを着てとか、学校にも行かないで先生に暴言を吐いてとか、先生を追い出して学校を封鎖してとか、火炎瓶を投げてとか、誰が考えてもなんという奴が出てきたのだという風に見られたと思うのです。次の世代が出来てくるときには、そういう印象を持って迎えられるものだと思います。そういう意味の倫理なら、倫理を考える時に、本当に変わらないものと、変わらないと思っていても劇的に変わるものを、区別して考える必要があるのです。

たとえば、江戸時代と明治と現代で、根本的に同じものでありながらイメージの変わったものに、二宮尊徳があります。二宮尊徳という人は、明治時代の富国強兵の中で、インダストリーの象徴として全国の小学校にその銅像が建てられました。インダストリーというのは勤勉という意味で、産業と同じ言葉から来ているのです。江戸時代に、尊徳伝というのが残されておりまして、それを読むと、当時の人たちは、二宮尊徳は一寸おかしい人、今で言う多重人格の人と捉えられていたことが分かります。分かり易くいえば、一つのことに集中できない人です。田んぼのあぜ道を、柴を背負って歩きながら、本を読んでいる。柴を運ぶのなら早く家に帰ればよいのに、本を読みながら歩いているので、物に当たったりして危ない。ちょっと変な子だと、同時代の人たち、近所の人たちは捉えていた。それが、明治時代になると、勤勉が大事で、時間も体も一切無駄使いしてはいけない、すべて意味のあることに使わなければならない、時間の空白はいけない、体も無理に遊ばせてはだめ、ということになって、背中に柴を背負って歩きながら、空いている手で本をもって読むという風に、一つの時間に複数のことをしている二宮尊徳がインダストリー、すなわち、勤勉の象徴として導入されたのです。今、全国の小学生を見ていると、私には妙なリアリティーが感じられるのです。携帯電話を持ちながら自転車に乗っている子が二宮尊徳とほとんど同じです。危ないな、という感じです。こんな風に考えれば、尊徳のイメージは今の携帯族のイメージのようなもので、江戸時代と明治時代と現代で全然変わっていないとも言えます。

それから、今は、皆が自分のことを問いたくなるような淋しい時代であるということについて、お話しするのは、今日は止めておきます。

質問者C 今、携帯電話を持って自転車に乗っている小学生と、二宮尊徳とは大分状況が違います。その状況は、時代が違うんじゃないですか。尊徳さんの時代は車もない、本を読みながら、

あぜ道を歩いていて、何かにぶつかったとしても、せいぜい人か小屋ぐらいで大怪我をするようなことは無かったと思います。今は、状況が全然違う。

鷺田 そうですね。自分があぜ道から落っこちるぐらいなら、笑って済ませられますが、携帯電話を持って自転車に乗っている方は、場合によると命にかかわる。

質問者C 命を失う恐れのある方法で本を読むなど、大変なことです。

鷺田 団塊の世代が今の小学生だったら、あの銅像に赤ペンキでペケと書いたかもしれません。

質問者C 今とは別の時代のことを完全に理解しようと思うと難しいことが一杯あります。今と一緒にくたにしてしまうと、駄目です。

鷺田 ちょっと冗談半分で挙げた例ですが、あまり適当でなかった、お許してください。

畑田 今日は是非一言と思ってこられた方が沢山居られると思います。どなたでもどうぞ。

質問者D ヨーロッパでは政治家がうそをついたら辞めさせられるが、日本ではうそをついても大丈夫というようなお話がございましたが。

鷺田 必ずしも大丈夫ではないですけど。

質問者D それは、日本では協調性を重視するというような文化の違いから来ているのでしょうか。

鷺田 理由はいろいろあると思います。日本伝来の村社会から引き継いでいる倫理と近代社会になってからのルールの問題とが絡み合っております。習慣、マナー、ルール、法律と様々なレベルの規範が関係しております。こうしないといけない、こうするのだということがいろいろなレベルで設定されていて、それぞれの規範は出てきた経緯が違うので、うまくお互いに適合する場合と、そうでない場合とがあります。だから、一つの答えでシャープに答えることは出来ないのです。ただ、基本的に、ヨーロッパ社会は、古代から現代までずっと戦争をしてきた風土、民族移動が起り続けていた社会、ずっと国境が書き直されてきた社会で、日本はそうではないという文化の違いはあると思います。

質問者D 日本は国境も変わっていないし。

鷺田 私が強調したいことは、たえず国境が変わってきた社会、狭い範囲に多くのお互いに理解できない言語がある、そういう歴史を持っていて、さらに、19世紀後半からは大都市化の波が押し寄せて、ウィーン、パリ、ベルリン、ロンドンなどの巨大都市ができて、そこに労働力としていろいろな言葉を持った貧しい人たちが流入してきて、いろいろな問題を抱えながら歩んできたということです。その二重の歴史の中で、互いに全く素性が分からないもの、出身も分からない、文化的背景も分からないもの同士が、同じ場所において、意を通じるにはどうしたらいいか、というのがコミュニケーションの基本的な形です。互いに見知らないものが、見知らないままに、きっちりと話し合える仕組みをどう作ったらよいかというのがヨーロッパにおける対話、コミュニケーションの基本課題なのです。

日本の言葉には、方言はありますが、基本的に一緒です。江戸時代に、それぞれの藩から出て行くということは、余程の覚悟がないと出来ない、決死の覚悟がないと出来ないような、特定の閉じた社会でした。その中では、互いによく見知っているもの同士、つまり子供のときからお互いよく知っているもの同士、文化的背景も分かっているもの同士がうまくやっていくにはどうしたらいいかというのがコミュニケーションの課題なのです。日本的なコミュニケーションの理想は、話さなくても分かる、言わなくても分かる、それが一番美しいコミュニケーションであって、

わざわざ口に出して言わないといけないのは、まだまだ関係が浅いからだ、コミュニケーションが浅いというイメージで捉えられてきたのです。だから、お年寄りの夫婦が1日中一言も喋らないでいられるのが、まるで理想のように語られたりするわけです。

ヨーロッパの場合は、大都市に、いろいろな国の人がきていて、互いに全く共通の背景がないままに一緒に住んでいるような社会ですから、お互いに見知らないものが、見知らないままできっちりと意を通じさせる、物事を一緒に決める作法としてのコミュニケーションが必要になるわけです。ヨーロッパと日本では、コミュニケーションの理想、作法という原則が違うということになります。しかし、日本でも、都市社会では、実質的にはヨーロッパが経験してきた歴史と同じことを経験しているのです。今、日本はすさまじい勢いで都市社会化していて、郊外まで都市社会化してきております。大きな町、あるいは、マンションに住むと、お互いに日本語を喋ることだけは分かるが、それ以外の背景はお互いに知らないし、文化的背景も知らない、関係がないというヨーロッパの都市型社会生活が日本にもかなり定着してきているのです。ニュータウンと呼ばれるような社会の中では、ヨーロッパ的な原則、すなわち、コミュニケーションの理想は言わなくても分かるという原理ではなくて、お互いによく知らないもの同士が、知らないままで、マンションの建替えやゴミ処理問題などについて、きっちりと話し合えるようなコミュニケーションのトレーニングが必要になってきていると思います。今の時代は、これは完全に日本的、これはヨーロッパ的、これは中国的、アジア的というふうには、簡単には言えないのです。みんなが、ある種の近代を経験しているわけです。そう簡単に何々のとは言えないけれども、コミュニケーションの原理には、たとえば、日本がかつて考えてきた、言わなくても分かるというのと、ヨーロッパが苦勞して培ってきた、哲学に基づく議論・討論があります。今の社会に生きるわれわれは、これら2種類のコミュニケーションの能力を培わなければならないのです。

本来、政治というのは、いろいろな出身の代表者が互いに議論しながら行うものですから、見知らないもの同士のコミュニケーションの原理でやらないといけないのに、日本の政治は永田町という村の、おまえ未だそんなことをいちいち聞いているのかというような論理で動いています。そこが、ヨーロッパの、虚言をしたらすぐ辞めるというのと、言わずもがなとか、あるいは、言ったら終わりというような文化との違いではないかなと思います。

畑田 そういうことは、教育の世界でじっくりと子供に教えておくべきことなののでしょうか、それとも、子どもが自分で体得するべきことなののでしょうか。

鷲田 これはものすごく大事な問いですね。教えないで、見せるということだと思います。子供に教えようと思っても、子供は毎日テレビや新聞で不祥事、賄賂、いろんな不倫、詐欺というようなニュースを見て知っているわけですから、そういうことを隠して、きれいにこうあるべきだと教えても、その言葉は重くは受け止められない。子供には、ああ、きれいごとを言っているなととらえられてしまうと思います。今は、子供には悪い面ばかり見せています。逆に、たとえば、こういうことが起こらないように、先に根回ししている姿とか、トラブルが取り返しのつかない形で起こらないように、あらかじめちょっと一言いっておいて、相手の意見を聞いておくとか、不満に思っている人の話をとことん聞く、たとえ、受け入れられなくてもとことん聞く。そういう地味な努力も、不信感をつくらないために、あるいは、最悪のことにならないために、大人は苦勞してやっているのですが、子供にはそうした努力などは全然見せていないのです。これは、大人社会の問題で、大人の世界を子供にどう見せるかという点でのアンバランス、報道のひずみ

が問題だと思います。

畑田 大人の地味な努力を子供に見せる努力をもう少し積極的にやらねばならないということでしょうか。ニュースの題目に何を選ぶかということも大事です。

鷲田 そうなのです。教育の問題を語るときに、子供をこういう風に育てようとか、次世代をどう育成するかとか、皆さんそういう言い方をされます。育てようという他動詞で語られるのです。でも、この社会を見ていると分かるように、正直なところ、育てる方もたいして出来が良くないのです。私は教育の理想は、どう育てるかではなくて、子供が自分で育つ場をどのようにして作るかだと思っています。教育の成果は、これにかかっていると思うのです。子供を育てるのではなく、子供は自然に勝手に育たないといけないので、そのための場をどう作るかということが問題なのです。

昔、今のように日本が都市化する以前は、小さな共同体の中で、大人は良いことと、いけないことの両方を子供に見せない振りをしながら、見せていたのです。大人が仕事をしている場所に子供を自由に出入りさせていました。たとえば、子供が大工さんのかたわらで遊んでいたら、「おい気をつけるよ」とは言っても、出て行けとは言いませんでした。子供は大人の働いている姿を見ていて、悪いこと、たとえば、喧嘩をしたり、「いけず」をし合っているところも、見るとはなしに見ていたのです。それから、お祭りの時に、相撲をしたり、賭け事に興じたりして遊んでいることも、ばかな遊びに、お金を賭けているのも見ていたのです。大人の方も、それを無理に見せるつもりは無いが、見ているのを分かっているながら隠すことはしなかったのです。私自身はそんな中で育ちました。大人が、なんでもないあたりまえのことが成り立つために、見えない所で日々努力して、寄り合いをしているとか、お祭り一つするのにどれだけ準備をしているか、というようなことを見ていました。だから、大人がお祭りの後、無礼講のようにしてドンチャン騒ぎをしても、打ち上げとはこういうことなのかと分かったのです。ところが今は、子供はオフィスには入れない、何かを作るときの過程を見せないで、クライマックスの祭りと、そのあとのドンチャン騒ぎだけを見せています。見て見ぬ振りをするのではなくて、見せて、見せていない振りをするということが大事なのです。

私の例を一つお話します。私は勝手に育ったと自分では思っています。父親は賭け事の好きな人でしたし、家には寝にしか帰ってこなかったので、父から何かを習ったという記憶はありません。母親は、私が小学生のときから中学生の終わりまでの8～9年間、家で寝たきりでしたから、母親には特に教育を受けたわけでもありません。母方の祖母が私の母親を世話していました。家には、父方の祖父がいましたが、役に立たないといって母親を蹴ったりするのです。母親の病気はカリエスで、その横でおばあちゃんが泣いているのです。そんな中で、僕は、とにかく、家を出て友達と遊ぶことと、家に帰らないことしか元気になる方法がなかったので、家庭で教育されたという記憶はなく、家の近所で教育されたと思っています。おばあちゃんがない時には、母親は料理ができないので、僕が買い物に行くのです。ピンク色のビニールの買い物籠をぶら下げて、小学生が買い物に行くのは、なんとなく気恥ずかしいものでした。六条通りという細い道を3筋いくと肉屋さんがあり、そこでコロッケを買います。途中、八百屋のおばちゃんなどに声を掛けられます。本屋さんの人が、「ボク偉いなあ、頑張りや」と言ってくれます。こちらは、そんなこと言って欲しくない、透明人間になりたいくらいの気持ちなのです。コロッケを買うのに、同級生が通らないように、特に女のクラスメイトが通らないようにと祈るような気持ちで並

んでいると、大きな声で、「今日はボクの分1個負けとくぞ、帰りに食べや」といって、1個余分にくださる。私は、そんな中で鍛えられたのです。帰りは、いやな視線をはねのけて、声を掛けられないように、家に向かってダッシュです。でも、みんな僕が可哀想やと思って親切にしてくれる、何も言わなくてもコロッケ1個だまって余分に包んでくれる、うっとうしいこともあれば、嬉しいこともあったのです。それから、僕は一人っ子で、また、叔父も叔母も、いとも少なく、しかも近くにいない、本当に、親と子、おじいちゃん、おばあちゃんだけでしたから、叔父、叔母の視線を浴びることもなかったのです。近所の人が、気にかけてくれていました。その時は、うっとうしかったけれど、歳をとってから考えてみると、ああやって、黙ってみて見ぬ振りをしながら、支えてくれた人がいたおかげで、自分は育ったのだということがよく分かります。今は、そんなことをしてくれる商店街が無くなってきました。新しいニュータウンでは、商店街もなく、子供は、学校、塾、家の間をバスに乗って往復している、あるいは、親に車で送り迎えして貰っていて、商店街の視線にもまれたり、支えられたりする経験をする機会が少なくなり、先生だけに教育が任されています。しかし、教育はみんなの責任、みんなが協力してやらないといけませんので、先生だけで、出来る筈がありません。先生のほうは、先生のほうで、保護者と生徒がこわい。保護者は、先生のやり方が悪いと言っては、いちゃもんをつける、あるいは、先生と共犯関係になって、最近の高校における世界史の未履修問題のようなことを惹き起こす。私は、受験の結果だけを求める保護者も悪いし、その親がこわくて、学校の成績を上げるためにそういうことをする先生も悪い、また、それを見て見ぬ振りをした教育委員会も悪いけれども、高校生も悪いと思います。高校生だって、教科書は配られているのですから、自分たちの学校で行われていたことが分かっていた筈です。何も知らなかったなどと、そんな手前勝手なことを言っはけません。

畑田 高校生が被害者だなどと言っはけませんよね。

鷲田 そうです。みんなおかしくなっているとしか言いようがありません。本当に高校生だけが被害者なら、可哀想ですが、私は、分かっはなかつた筈がないと思います。誰も「おかしい」と言えない構造がおかしいのです。

畑田 一度こういうことを、きっちりと皆が理解しないと、今の教育はもうどうにもならないところに来ているような気がします。今、鷲田先生がおっしゃった、教育は先生だけで出来るものではないということなのですが、戦後に導入されたPTA、あれは、先生と保護者が一緒になって教育のことを考えていこうということで出来た組織だと思ひます。PTAに学生も入れて、一緒に教育を考えようという時代になってきているのに、教育の場でおかしなことが起こつたらすべて先生の責任というのは少しおかしい。

鷲田 以前は、PTAは学校のボランティアのサポート隊だったのです。今は、抗議団体、圧力団体みたいになっている場合があるのではないのでしょうか。

畑田 そうなっているところもあるようです。大事なことは、学校教育に対する家庭・地域社会など外からの支援がなければ学校教育は成り立たない、そこで、PTAの果たすべき役割は大きいということだと思ひます。こういうことを、一度PTAで話し合っは欲しいですね。

質問者 D ヨーロッパは狩猟民族で、友だち同士でもイエス、ノーがはっきりしている。問題が起こればすぐに裁判を起こす。日本は農耕民族、貸し借り勘定で世の中が動いている。だから、今の建築問題にしても、談合問題にしても、農耕民族の感覚でことが運んでいる。先生はこれに

ついてどうお考えですか。

鷲田 おっしゃるような考えも成り立つと思います。ただ、他の狩猟民族、たとえば、アフリカではどうなのでしょう。私はアフリカを調べたことがないのでよく分からないのですが、日本は瑞穂の国を強調してきましたが、あれは虚像でして、日本が本格的な農耕社会になるのは18世紀の中頃からです。新潟平野、濃尾平野、関東平野に瑞穂、すなわち稲がたわわに稔っている水田風景は18世紀の半ばからです。だから日本が農耕社会といえるようになったのは比較的新しいことであって、それまでは狩猟社会なのです。こういうことも考慮して、今、日本史の世界が大きく変わりつつあります。支配階級の歴史、都市の歴史、政治の歴史、農業の歴史を調べるとともに、漁業についても、あるいは、狩猟についても考えないといけないというふうになりつつあります。したがって、農耕で日本を語るのはいち行き過ぎだと思います。もう一つ、日本は瑞穂の国で島国だ、日本人は島国根性を持っているといいますが、これも、日本史の研究者の間では、かなり疑問のある考え方ということになっております。というのは、日本は島国で、外に開いているのは出島だけだったということになってはいますが、日本は周りが海ですから、漁民や商人には日本海をまたいだアリューシャンとの交渉がありましたし、南洋との交渉もありました。琉球は中国や朝鮮半島と密接な関係がありました。日本は、鎖国時代にもあまり封鎖されていなかったことがだんだん明らかになってきて、本当に島国だったのだろうかという疑問が出てきて、検証されつつあるのです。今日、私たちがおります大阪の河内でしたら、徳島へ行くのに、淡路島経由で徒歩と船で行くよりは、直接船で行く方がずっと早い。大津と彦根の間も、歩いて安土を通って行くよりは、琵琶湖を船で渡るのが一番早い道筋だったのです。連絡や運搬の方法としては水上を船で行くのが一番早かった。そう考えると、秋田や富山からは江戸へ行くよりも朝鮮半島へ行くほうがはるかに近かった可能性があります。こういう研究は未だほとんど進んでいないので、今、日本史を書くのは、非常に大変なことです。また、19世紀の半ば、幕末までは、北海道と沖縄は国境の外でした。平安朝の時は、北はせいぜい平泉まで、南は熊本あたりまでが大和の国で、そこから北と南は大和の外でした。そういう時代を経て今の日本が出来上がりました。日本を考える時には、国家の体制や国境から考えるよりも、樺太あたりから台湾あたりまで連なっている長い列島があって、それぞれの島がそれぞれの長い歴史を持っていて、いろいろなところと交流し、文化を作っていた、そういう、文化が混ざり合っている列島の中の日本という風に考えないと、うまく日本の歴史が書けなくなっているのです。今、少子高齢化といっていますが、江戸時代にも、繁栄の後に少子化の時代があったのです。その時どうしたのか調べようと思って、私は、この間、ちょっと歴史学の研究会に行って勉強したのです。その江戸時代の少子化の時に、東北地方に子返しという習慣があったそうです。これは、生まれた子を神さまに返すという習慣で、具体的には生まれた子を殺すことです。西日本で比較的多いのは、捨て子、もらい子という習慣です。本当にもらわれることもあるのですが、生まれた子供を箱に入れて置いておけば誰かがもらってくれるだろうということを期待しての捨て子です。江戸時代のことから、ついこの間のことのように思うのですが、文献も残っておらず、研究もほとんどなされていないので歴史書には書けないのです。卑弥呼が現れて、大和の朝廷があって、というような順番では歴史の全貌が描けないというのが日本史の現状なのです。だから、ご質問のような考え方は一つの説としてはあると思うのですが、日本がそういう考え方にぴったりと合うのかどうか、日本の国がそういう考え方で100%説明できるのかどうかは、もう少し歴史の研究を待たないと

いけないと思います。

質問者 E 先ほど先生から、日本の社会は成熟社会だといわれることがあるけれども、その中にいる人間は、大人も子供も非常に未熟だというお話がありました。しかし、私はそうは思わないのです。日本社会は、非常に成熟した社会であって、成熟した人がたくさんおられると思うのです。それを、先生は、未熟な人間が沢山いて、大変困った状態にあると言われたように、受けとったのですが、私はそうではないと思います。私が小さいころに比べると日本の文化は進んでいて、日本は非常に成熟した素晴らしい社会になっていると思うのです。非常に困った状態も一部には発生しているけれども、全体としては素晴らしい社会になっていると私は思うのです。皆さんが、困った、困ったと発言しておられますが、そして確かに困った内容の事件が最近急に多くなって、私も残念だなと思うこともあるのですが、一番大事なことは、個人としていかに喜びある人生を送れるかということだと思います。また、先ほどお話のありました日本語のことで言えば、日本の言葉が非常に多岐にわたっていて、たとえば、身という言葉、私は、これは精神面の方が重要視された言葉だと思うのですが、実際は肉体と精神の両方に使えるということなら、これは非常に素晴らしいことで、不便という風に捉えるべきことではないと思うのです。

鷲田 私はそれを不便と言ったのではありません。日本語は、われわれ日本人が見ればしっかりした言葉だが、ヨーロッパ人から見ると分かりにくい変な言葉で、ヨーロッパ人には、日本語だけではなく、日本人も非常に変わった、理解しにくい人種だと思えるということなのです。日本語は、日本人にとっては、一つも不便なものではありません。

質問者 E 国際的立場では、そういうことは非常によく分かる状態になっていると思うのですが。

鷲田 その通りです。外国の人から見たときに、日本語って変だなあと思うのは、逆に、私たちがそれまで知らなかった言葉を習った時に、こんな言葉があったのか、変だなあと思うのと同じで、お互い様なのですけれど、ただ、今、日本の社会に起こっている問題、これは日本の国内だけの問題だということでは済まされないことばかりなのです。われわれが国内問題だと思っている問題が、実際はすべて国際社会につながってしまっているところが難しいのです。日本食といながら、その食材はほとんど貿易で手に入れているように、いろいろな点で外国とつながっている。鯨だけでなく、最近マグロも問題になっています。食の安全性も、難しい問題になってきました。しかも、これらはものすごく複雑にいろいろなことと絡み合っていて、国内問題として処理することは不可能になってきました。

質問者 E もう一つの問題は、報道のあり方です。報道の自由を盾にした今の報道の仕方が日本社会をおかしくしていると言えないこともない。それが悪いというのではなく、良い方向にもっていくにはどうすればよいかということを考えれば、もう少し社会が良くなるのではないかと思います。

畑田 大新聞の社会面を見ると、悪いことばかり書いてあるような気がします。ところが、ミニコミ誌や地方紙を見ると、良いことばかりとは言いませんが、良いことが一杯書いてあります。大きな新聞は、あれだけお金を使って、あれだけ力を使って、なぜ、日本の国にはこんな良いことが沢山あるよということを書いてくれないのかと思います。

鷲田 私もそういう疑問を持ちますね。でも、メディア自体も競争原理で動いていて、ニュース源そのものにどういう価値があるかということよりも、ニュースとしての価値があるかどうかという判断の方が優先します。非常に大事なことを書いた記事でも、よそが先に報道したら、その

記事を書いた記者がデスクに怒られて、記事はボツになります。競争原理というのがものすごく報道をゆがめていると思います。また、記者が、先ず、ニュースの価値を自分で決めてしまい、それに合致するものしか報道しないということもあります。新聞は、本来は専門家、研究者、あるいは、知識の専門家と一般の人を分かりやすい言葉でつなぐ媒体のはずなのです。だからメディアと呼ぶのです。政治や経済あるいは科学技術の専門用語と一般市民の言葉があまりにも違うから、両者を分かりやすい言葉でつなぐのがメディアの仕事なのです。行政に関する報道でも同じです。報道の内容は政治、経済、行政、科学・技術などの専門家がメディアと一緒に作っていくものなのです。残念なことに、今の日本のメディアはそういう原理では動いていません。たとえば、大学では沢山の先生が一所懸命働いて立派な研究をしている、新聞こそ、それを一般の人たちに広めて欲しい、社内にそういう文化を培ってくださいといつもお願いしているのですが、記者にとっては、よそがつかんでいない情報にしか関心のないことが多いのです。

畑田 よそがつかんでいない情報という観点ではなくて、よそは絶対書かないであろうと考えられることをどんどん書く新聞があれば売れると思うのですが。

鷲田 新聞に対する信頼は高まりますよね。

畑田 申し訳ないですが、もう後10分ほどしかありません。いつも最後の方になると時間がたりなくなるのです。

質問者 F 私は、団塊ジュニアで、センター試験1期という歳がばれるのですが、そういう世代です。哲学、倫理学は入試のためにしか勉強しませんでした。これまでの仕事は医療、福祉、教育の分野でやってきましたが、今日、先生のお話を聞いて、哲学や倫理が非常に大事なものであることに気付きました。教育者の私を含めて、私たちは何から学び始めたらよいのでしょうか。また教育者としては、どうやって哲学・倫理の大切さを伝えていけばよいのでしょうか。

鷲田 哲学書を読めとは言いませんし、また、哲学書を読めば何とかなるとも思いません。でも、本当に大事なことを書いている哲学書は読んで欲しいなと思います。哲学は、本を読んで考えて編み出すものではなくて、自分で編み出すもの、人の中に発見するものなのです。だから、たとえば、私は不幸にしてそういう料理人に一度もお会いしたことはないのですが、料理の哲学があるとしたら、その料理人が作ってくれたものを口に含んだ時に、料理とはこういうものなんだということがウーンと納得できる、つまり、食べるという行為の中で、料理とはこういうものだと感じられたら、料理の本質が理解でき、料理の哲学を発見したとっていただいでよいのです。

町の中には、自分では哲学のかたちで表明しているつもりではなくても、いろいろな哲学を体現している人がおられます。「ああ、いらっしゃいませ」と挨拶して、すごく明るい話を始める人の中にも哲学が見出せます。自分の仕事、自分の地域での活動、あるいは、自分の家族運営において、これだけは絶対に外してはいけない、非常に単純な言葉でしか言われないが、絶対これだけは外すな、あとは何をしてもいいと、大事なことについてのきっちりした判断を持っている人には哲学があるといえます。人のことは知らん、俺のこの仕事のこのやり方だけは曲げられないという人は、一見、ただの意固地にしか見えないかもしれませんが、よく見ているとものすごく深い考え方をお持ちのことが多いです。長い時間をかけて培ったそういうものを発見して言葉にすることが、あるいは、人に伝えることが哲学なのです。そのことで、私は、哲学は自分で編み出さなくていいのだ、発見したらいいのだとも思っています。たいした人生も送っていないのに、

人を説得する哲学を編み出すなんて、おこがましいじゃないですか。

ここで、私が非常に大きな衝撃を受けたお話を一つさせていただきます。それは、中川幸夫さんという、もう80歳を過ぎた前衛華道のお花の先生のことです。この方に、本当に、私は命についての哲学を教わった気がしております。中川幸夫さんをご存じの方もいらっしゃるでしょう。中川さんは香川県出身で今は東京中野にお住まいの80代後半のお方で、最近では認知症がひどくなって、お花には余り関心を示されないのですが、小さい時、事故にあって、お体も小さいし、背中も曲がっている人なのです。最初、堺の印刷屋さんに勤められたのですが、体がもたないで、結局、郷里の香川県丸亀に帰ってこられました。おばさんがお花の先生だったので、お花を生けることだったら体力がいらないし、それなら、お花のお師匠さんになろうかと思って、京都のさる家元のところに行って、人生を始められたのです。そこでいろいろな人たちと触れ合う中で、毎日新聞社の全国生け花大会に、みかん箱の中に土を入れて、それに白菜をドーンと1個生けた作品を出品して、破門されたのです。それは、作品が前衛的だということもあったのですが、他に、古い社会ですから、下見会に来なかったということが、師匠の逆鱗にふれたということもあったようです。お花の世界で破門されると、師範になれない、お弟子さんをとれないということで、お花では食べていけない。それで、彼は、東京に行って、台湾の人に助けられて、お花のそばには居たいということで、新宿と渋谷でキャバレーの花の生け替えをして、食いつないでいられるのです。奥さんもすごい人で、よその家元夫人だったのですが、中川さんを追いかけて行って、一緒に駆け落ちされたのです。『弱さのちから』という講談社出版の本で詳しく紹介したことがあるのですが、2人で安アパートに住んで、毎日お金がないので、樁の実なども茹でて食べるような極貧の生活を続けておられた。そんな中で、高い花は買えないので、キャバレーの萎んだ花を持ち帰って、奥さんとこれをどう生かせるかと、工夫を続けられたのです。

中川さんが、最初に、アートの世界で劇的にデビューされたのは、「花坊主」という作品によつてです。ガラス瓶の中にもぎ取ったバラの花を入れておいて、1週間ほどして、腐って、汁が出てニルニルになったところで、和紙の上にドーンとひっくり返してみたら、ワァーと腐った花の血が紙の上に広がった。これを花坊主という作品にして出品したら、生け花以外のアート関係の人の絶賛を博しました。それで、そういう作品をいろいろつくられて、非常に有名になられたわけです。私はあるテレビ番組で、こんな世界もあるのかと感動して、東京のお宅にお邪魔しました。生け花に使うお花は、花が咲き始めるときから、開ききるまでで、枯れてヘナヘナになってきたら普通は生け替えます。中川さんはそれがおかしいと思われたのです。薔も花なら、枯れたのも花、腐ったのも花、これが花の一生なのだ、それにもかかわらず今の生け花の世界は花の命のワンシーンしか表現できていないではないかということで、中川さんは死ぬ間際の花の命を表現しようとされたのです。

「私は突拍子もないことをやっているのではないのです」、そう言いながら中川さんは私に一冊の室町時代の立て花の手本を見せてくださいました。その本に私はまた衝撃を受けました。室町中期の華道の初期には生け花ではなく立て花といったのです。今の華道では、水仙というと日本刀のようにピーンとなっている葉っぱと茎でないと、生け花には使えない、ヘナヘナになったら終わりなのです。ところが、節分を過ぎる頃から水仙はヘナヘナとしてくるらしいのです。上記の本には、ヘナヘナになってフニャーとしている水仙の活け方の手本、ヘナヘナの水仙の表現の仕方が載っているのです。中川さんの手法は何も彼が突然始めたことではありません。嘗ての華

道は、花の若いときから、壮年の時を経て老いに入り、萎れてくる時まで、それぞれの命の局面に即して仕方を変えて表現したのです。中川さんは、そのお手本にヒントを得て、花が死ぬところ、花の最後を表現したのです。

これはすごい哲学だと、私は思いました。理由は二つあって、一つは、中川さんを見ていると、私たちの社会は、ずうっと盛りだけを評価するというやり方で来たのだなあと思います。人間の場合には、大人、壮年、しかも、女ではなくて、男、男だけを評価してきた。その次に評価されるのは若いということ、つまり、いずれすごい生産性を発揮する壮年になる可能性を秘めているものとしての若さです。壮年と若さが愛でられる社会、それに外れるもの、すなわち、子供と女性と高齢者が、文化の周辺に追いやられる社会、そういう社会を、日本は明治の近代化以降、強引な腕力で作り上げてきたのです。中川さんのアートには、それへの批判を見出すことが出来ます。命はすべて命であって、命のここには価値があって、ここには価値がないというようなことはない。命は初めから終わりまで、それぞれの段階で価値があり、命を具現する姿がある、それが「花」で、それをきっちり表現するのが生け花の仕事なのだという考えは、今の社会での命の扱われ方に対する厳しい批判になっています。社会の中で命を見るときには、こういう考えを基本にして見なさいよと、中川さんは教えてくれているのです。これが、私が学んだことの一つです。

もう一つは、私のお花自体の見方が変わったということです。以前から、華道というのは少しおかしいなあと思っていたのです。生け花というけれど、私にはどうしてもいじめ花、殺し花としか見えない。だって、花の木から材料を切り取ってきて、人間が勝手にこの葉はいらない、この花弁はいらない、花1輪と1枚の葉だけでいいとが言って、かってにむしってしまう、そのうえで、美しく見せるために、ためるとかといって枝をギュウツと曲げる、花にとっては痛いですよ。極めつけは剣山に刺すでしょう、なぜこれを生け花と呼ぶのか、本当に不思議だったのです。でも、中川さんのお話を聞いてから、今のお花についてあらためて考えてみると、そこにも哲学が見出せることが分かってきました。それは、今のお花の作法は、われわれが日常やっていることをただ再現しているだけだということです。私たちは、毎日、家畜、魚、野菜、果物を食べて生活しております。大事に、大事に育ててきたものを、肉でも野菜でも、バサーと切って、炊いたり、焼いたりして、食べます。われわれの食べる文化とは、大事に育ててきたものを、ある時点から首をはねたり、切り刻んだりして、いじめたおして、人間にとっては美しくみえる形に作り直して、美味しい、美味しいと食べるものなのです。お花は、われわれが普段生きるためにあたりまえのようにやっていることが、実際はどういうことなのかを、作法や殺すシーンは見えないようにしてはいるけれども、綺麗にできた作品を通して学ばせてくれているのです。上手に作られた料理は、美味しく、美しく、おしゃれという表現が使われることすらありますが、本当は、食べるということは自分以外の何かを殺すということなのです。塩と水以外の食材は、ほとんど生き物ですから。生きるということの本当の意味を、お花自身が、皮肉なやり方で教えてくれているのです。こういう風にして、哲学を教わり、学び、そして、見つけ出すのです。考えて、考えて、考え抜く独創的な哲学者といわれる人がいるけれども、本当にそうかなと思います。一人の人間が自分の頭で考えつめて、思想ができていくというよりは、何かある衝撃的な事件を見る、あるいは、衝撃的な生き方を見る中で、人は自分が教わるかたちで、思想を作り上げていくのだと思います。たとえば、共産主義の創始者マルクス、あるいは資本主義経済の分析をした人

は、無産階級つまり財産を持たない人、最初から何かを所有することから完全に排除された人や 19 世紀のロンドンの工場の地下にある狭い穴の中で、5, 6 歳の子供が働いている姿を見て、ああいう思想を思いついたのであって、単にヘーゲルを一所懸命勉強したから、ああいう思想が出てきたとは、私には思えません。だから、私はあなたに、一から深く考えろと言うつもりはありません。それよりも、身の周りのいろいろな人々とのお付き合いの中で、ほんまものの人を見つけ、その人に一番大事なことを学ぶ、自分の仕事とのかかわりの中で、自分の生き方の参考になりそうなことを見つける、というところから始められたらいかがでしょうか。

畑田 先生、少し話をそらすようですが、水や塩には命がないというのは、私はどうもおかしいと思うのです。なぜ、水と塩には命がないのですか。

鷺田 命がないというか、それを食べるときに、普通の生き物のように殺さなくてもよい。普通に命があるというものを人間が食べるときには、殺してから食べます。

畑田 だけど、水や塩は、やっぱり生きていると思うのです。だって、流れている小川の水と池の水は違いますし、水道の水と池の水も違う。命があるからそうなのではないかと思うのですが、こんなことを言っていると、今日の議論には終りがなくなってしまう。

いずれにしても、只今の先生の質問に対するお答えは、哲学についての根本をお話いただいたもので、今日の先生のお話の素晴らしいまとめをしていただいたと思います。あと 2 時間ぐらい議論を続ければ、鷺田先生からもっと沢山の興味深いお話が聞けると思うのですが、残念ながら大分寒くなってきましたし、バスの時間のこともありますので、今日の集まりは、この辺りでお開きとさせていただきたいと思います。今日来ていただいた皆さん方は、このフォーラムに参加して本当に良かったなと思っていただいていることと存じます。鷺田先生、長時間本当に有難うございました。

皆さん方、これからも、答えの出せない問題の答えを求めつつ、生き続けていただきたいと思います。本日は本当に有難うございました。

本稿は、2006 年 11 月 19 日、大阪府羽曳野市郡戸の畑田家で、畑田家住宅活用保存会主催、大阪大学総合学術博物館協賛のもとで開催された哲学フォーラムでの鷺田清一先生のご講演と講演後の質問・討論の録音記録をもとに、畑田耕一（大阪大学名誉教授）と矢野富美子（元大阪大学技術専門員）が編集し、鷺田清一先生の校閲を経て作成したものである。

編集に当たって貴重なご意見をいただきました姫路工業大学名誉教授三軒齊先生ならびに大阪大学出版局編集長岩谷美也子氏に厚く御礼申し上げます。

畑田家住宅活用保存会 <http://culture-h.jp/hatadake-katsuyo/index.html>
<http://culture-h.jp/hatadake-katsuyo-english/index.html>